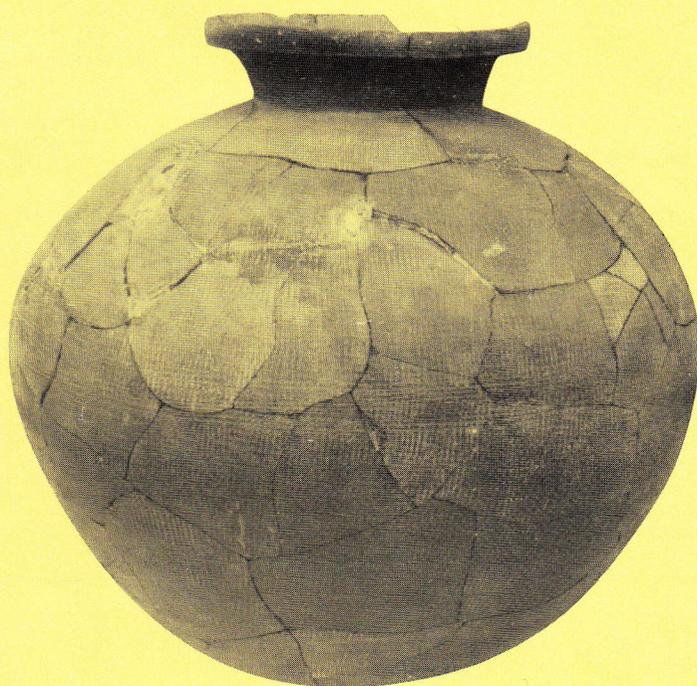


和歌山市楠見

雨が谷古墳群調査報告



和歌山市教育委員会

1973年

序 文

本市の中心地より北方約4kmに位置する楠見遺跡・大谷古墳と平行して今回調査を実施した雨が谷古墳群が存在しています。

当市の山間平地には数多くの古墳・遺跡がのこされており、和歌山の古代史を考える上に重要な学術資料が包蔵されていますが、近代都市形成、また産業開発にともなう機動力の要請と相まって、それ等の埋蔵文化財は、ややもすると危機にひんし、保存か開発かの深刻な悩みの一つでもあるわけです。

このことは、他都市におかれても同様な事例があらうかと存じますが、その例にもれず去る昭和46年11月、和歌山市楠見地区大谷と善明寺にまたがる山間一帯を住宅団地造成のため東洋不動産株式会社が買収し山林の樹木を皆伐進ちょくしていたおり、県文化財地区保護員から古墳らしい埋蔵文化財が存在するとの報告を受けました。

早速、県市文化財係員によって現地踏査を行ない、その結果、東洋不動産株式会社、大高建設株式会社の関係者を招き、古墳の確認調査を第1期、発掘調査を第2期として東洋不動産株式会社へ申し入れと同時にその協力と保存等について依頼しましたところ、調査費の全額納入と併せて埋蔵文化財の重要意義を認識していただきました。

ここに、それ等の古墳群を無事調査完了できましたことは、一重に東洋不動産株式会社ならびに大高建設株式会社のご理解と、とりわけ日頃のご繁務にも拘らず調査担当者としてお引受けいただいた同志社大学文学部森浩一教授をはじめ同志社大学考古学研究室の学生諸氏のご尽力に他ならなく、この紙面を通じて衷心より厚くお礼を申しあげる次第です。

昭和48年3月31日

和歌山市教育長 稲垣 優

は じ め に

雨が谷古墳群は、その存在が認識されるようになったのは、数多い和歌山市の古墳群のなかではきわめて新しい。それは考古学界や文化財保護行政のうえから忘れられていただけではなく、古墳群の所在する地元でさえもほとんど古墳としての伝承を欠いていたのである。しかも紀の川北岸の山地形は、土地の表面が風化した和泉砂岩で覆われているため、風雨で流失した箇所が多い。そのため、地貌の現状だけで古墳の有無を考えたり、古墳と判断するのは危険である。このように雨が谷での古墳の存在が長らく知られていなかったのは半ば不可抗力というほかない。今回この地域での開発問題が発生したので、たんなる事前調査では無意味であると考え、遺跡の確認を目的とする第1次調査をおこない、その結果によって開発側との協議によりできるだけ遺跡保存を実現するという方針を打ち出したところ、和歌山市教育委員会はその意義を理解

し、その案を支持下さったので、その調査を担当した。なお第2次調査は封土の大半を流失していて現状では保存がむずかしい2基の古墳について実施した。したがってこの調査は一つの古墳群の学問的究明というだけでなく、保護行政の進め方に対しても苦しみの中からも、少しでもの前進を実現したと考えている。この古墳群のもつ意義はそれだけではさほど重要ではないが、和歌山市での古墳文化、ひいては日本の古墳文化を総合する時、基礎資料の一つになるであろう。約40日間の現地での調査を黙々と進め、また研究室での遺物整理を担当してくれた文化学科文化史専攻の学生諸君には感謝の言葉もない。さらに私のむずかしい注文を理解し、推進していただいた和歌山市教育委員会の方々にもお礼申したい。

1973年9月30日

森 浩 一

— 例 言 —

1. この調査は和歌山市教育委員会の委嘱をうけて同志社大学文学部文化学科考古学研究室がおこなった。
2. 現場の発掘には大学の外からも参加をえたほか、主として文学部文化学科文化史学専攻の学生の参加で発掘および遺物整理をおこなった。その氏名は巻末に掲げる。
3. 収録した写真は、とくにことわったもののほかは大野および久保哲正君の撮影による。
4. 実測図は参加者の分担製作したものであるが、トレースは主に大野・千賀がおこなった。
5. 執筆分担は文末に記したとおりであるが、第3章3号墳については坪之内徹・久保哲正・炭田知子・志賀和子の各君の協力をうけた。
6. 土器の実測図の縮尺は4分の1、埴輪は5分の1を基準とした。センチメートル・ミリメートルなどは *cm・mm* であらわした。

目 次

はじめに	1
例 言	2
和歌山市雨が谷古墳群調査報告	
第1章 調査の契機と経過	5
第2章 古墳群の位置と環境	7
第3章 各古墳の調査	8
1 号 墳	
2 号 墳	
3 号 墳	
1 5 地 点	
第4章 総 括	25

図 版 目 次

図版第1 古墳群の立地と環境	2) 埴輪10号とその付近の破片散乱状態
1) 北東から望む	3) 埴輪10号(壺形埴輪)
2) 南から望む	
図版第2 1号墳	図版第6 1号墳 須恵器
1) 墳丘	1) 須恵器大甕
2) 埋葬施設	2) 須恵器大壺
図版第3 1号墳	3) 須恵器壺
1) 墳丘裾部の須恵器出土状態	4) 須恵器無頸壺
2) 墳丘裾部の須恵器出土状態	図版第7 1号墳 須恵器
(大甕の遊離した破片を除いた状態)	1) 須恵器高杯
図版第4 1号墳・2号墳	2) 須恵器壺
1) 1号墳 棺側の須恵器高杯・杯	3) 須恵器罍
2) 2号墳 横穴式石室	4)~8) 須恵器杯
図版第5 3号墳 埴輪出土状態	図版第8 3号墳 埴輪
1) 埴輪2号(左)と埴輪3号(右)	1) 壺形埴輪(埴輪10号)
	2) 円筒埴輪(埴輪6号)
	3) 盾形埴輪(埴輪8号)

挿 図 目 次

図1 雨が谷古墳群の位置と周辺の主な遺跡	7	図7 1号墳墳丘断面図(墳丘裾部の掘込みと木棺)	10
図2 雨が谷古墳群の分布と付近の遺跡	7	図8 1号墳墳丘裾部掘込み内の須恵器出土状態	10
図3 1号墳墳丘測量図	9	図9 1号墳出土の須恵器実測図	11
図4 1号墳の埋葬施設と遺物の位置	9	図10 1号墳出土の白玉と刀子	12
図5 1号墳墳丘断面図(南北方向)	10	図11 1号墳墳丘裾部の須恵器大甕実測図	12
図6 1号墳墳丘断面図(東西方向)	10	図12 須恵器大甕胴部の叩文	12

図13	1号墳墳丘裾部の須恵器壺実測図……………	13	図25	3号墳埴輪出土状態実測図……………	18・19
図14	1号墳墳丘内と墳丘上採集の土器実測図……	13	図26	3号墳埴輪1号・2号・3号・5号実測図…	20
図15	2号墳墳丘測量図……………	15	図27	3号墳埴輪6号・7号・8号・9号……	12
図16	2号墳第2・第3トレンチ西壁断面図…	14・15		号実測図……………	20
図17	2号墳第1トレンチ西壁断面図……………	15	図28	3号墳円筒埴輪口部とその他の破片……	21
図18	2号墳横穴式石室実測図……………	16	図29	3号墳壺形埴輪実測図(埴輪10号)……	21
図19	2号墳出土の小玉……………	17	図30	3号墳盾形埴輪破片……………	22
図20	2号墳出土の鉄器……………	17	図31	3号墳家形埴輪破片と形象埴輪片……	22
図21	2号墳出土の須恵器と弥生式土器……	17	図32	3号墳出土の須恵器と弥生式土器……	22
図22	3号墳墳丘測量図……………	18	図33	3号墳須恵器甕の口頸部波状文と胴部叩文…	23
図23	3号墳墳丘断面図(南北方向)……………	19	図34	15地点出土の遺物……………	24
図24	3号墳墳丘断面図(東西方向)……………	19			

表 目 次

表1	1号墳出土須恵器計測表……………	14	表2	3号墳出土埴輪計測表……………	24
----	------------------	----	----	-----------------	----

和歌山市雨が谷古墳群調査報告

第1章 調査の契機と経過

1971(昭和46)年9月、和歌山市楠見にある通称雨が谷の丘陵に対する宅地造成工事計画があるという連絡を和歌山市教育委員会は受けた。同委員会はこれまでおこなわれたその隣接地域の発掘調査の結果からみて、古墳のあることを予測し、大野嶺夫氏に踏査を依頼した。同年10月から12月にかけての大野氏による数度の踏査によって、数基以上の古墳状の隆起があることが確認された。

和歌山市教育委員会からこの結果について対策をたてることの依頼を受けた森は、1972(昭和47)年1月10日現地を訪れ、同教育委員会と協議の上、これまでの調査結果からみてこの区域にたいする発掘調査の必要があると判断し、まず遺跡の確認調査の依頼を受諾した。現地での観察から尾根上の土砂の流失が激しく、古墳があっても原形を保っていないと考えられること、また古墳であった場合、保存対策をこうじる必要があることの2点から、まず造成区域内全域の古墳状隆起点にたいして、古墳かどうかを確認するための調査をおこなうこととし、2月20日から3月17日まで調査をおこなった。これが第1次調査である。この結果、計20箇所について地形測量と試掘をおこない、うち3基が古墳であることを確認し、そのうち1基(1号墳)は封土がきわめて少なく、土器が露出している現状であるため、発掘調査をおこなった。また工事予定地に隣接する丘陵下方の台地状の部分に1基の方墳と2基の円墳があることを確認した。この部分は、将来宅地地域への幹線道路が予定されているので、測量調査を併せ実施した。

1973(昭和48)年1月25日から2月9日にかけて第2次調査として、前回古墳であることを確認した2基(2号墳・3号墳)にたいして発掘調査をおこなった。

以下これらの調査の経過をたどろう。

調査日誌

第1次調査

1972年2月20日 清水・久保他6名、調査資材を現地へ搬入し、現場の設営をおこなう。地形測量の原点を設置し、5地点から測量をはじめめる。

2月21日 5地点の測量を完了する。

2月22日 東西の丘陵で計15ヶ所の隆起があること

を確認する。1号墳(1地点)の測量をはじめめる。

2月23日 1号墳の測量をつづける。西方の晒山丘陵では大規模な土取作業が続いており、危険であるので、背見山古墳を踏査し、保存対策を今のうちにこうしておく必要を申入れる。

2月24日 午前中、丘陵の下で慰霊祭をおこない、その後1号墳から発掘を開始する。1号墳の測量を完了する。

2月25日 1号墳は墳丘東側で須恵器大甕を検出し、古墳であることを確認。6・9・10地点の測量をはじめめる。

2月26日 1号墳は墳丘裾に浅い溝状の掘り込みを検出する。また墳丘南側で須恵器高杯を検出。8・9・10地点の測量をつづける。0地点を試掘し自然地形であることを確認。

2月27日 1号墳は埋葬施設の一端を確認。須恵器大甕を埋めもどし、再調査にそなえる。8・9・10地点は測量をおわる。7地点を試掘し自然地形であることを確認。

2月28日 8・9・10地点を試掘し自然地形および後世の盛り土であることを確認。2地点の発掘設営をおこなう。

2月29日 2地点の発掘をはじめめる。各地点の写真撮影をおこなう。稲垣優教育長が視察にみえる。この日新聞発表をおこなう。

3月1日 2地点の発掘をおわる。埋葬施設および遺物はなく、自然地形であると思われる。5地点の発掘をはじめめる。

3月2日 5地点で礫群を検出し、精査したが遺構かどうかはわからない。6地点の発掘をはじめめる。

3月3日 降雨のため作業を中止し、図面の検討と遺物整理をおこなう。

3月4日 5・6地点は精査をつづけるが、遺構・遺物は検出されない。2号墳(12地点)の試掘をおこなう。盗掘坑があり、その中で須恵器片、ガラス製小玉を検出、古墳であることを確認。1号墳に写真撮影のための櫓を組む。

3月5日 1号墳は墳丘裾の須恵器および埋葬施設の精査をおこなう。須恵器類は写真撮影・実測して収納する。5・6地点はトレンチをさらに掘り下げる。13地点の試掘をおこない、自然地形であることを確認。

2号墳の測量をはじめ。3号墳(14地点)は発掘をはじめ。

3月6日 1号墳は埋葬施設の精査をつづけ、東西方向の木棺直葬であることを確認。2号墳は測量と併行して発掘をおこなう。盗掘坑内に緑泥片岩の石材を多数検出。3号墳は埴輪の破片を多数検出。6地点は断面を検討し自然地形であることを確認。

3月7日 1号墳は埋葬施設より須恵器杯片・刀子を検出。2号墳は測量と発掘をつづける。緑泥片岩材は破壊された石室の石材と思われる。3号墳は東西方向に5本の円筒埴輪を検出、古墳であることを確認。

3月8日 1号墳は棺底で須恵器罌・壺などを検出。墳丘裾の須恵器類は、浅い溝状遺構の中におかれていることを確認。2号墳はトレンチを拡張したが、明瞭な盛り土は確認されない。3号墳の地形測量をはじめ。円筒埴輪は6本となる。

3月10日 1号墳は埋葬施設の写真を撮影し、実測をおこなう。3号墳は測量・発掘をつづける。3・4・5地点の試掘をおこない、自然地形であることを確認。

3月11日 1号墳は墳丘裾の溝状遺構を精査する。3号墳は埴輪列の検出に務める。測量を完了する。15~19地点の試掘をおこない、いずれも自然地形および後代の盛り土であることを確認。15地点で中世の遺物を検出。

3月12日 1号墳・2号墳は墳丘の断面実測をおこなう。3号墳はトレンチを拡張し、盾形埴輪の基底部を検出する。円筒埴輪を収納する。

3月13日 1号墳は断面実測を終え、埋めもどしをおこなう。2号墳は断面実測をつづける。3号墳は埋葬施設の検出に務めるが、確認できない。盾形埴輪を収納する。

3月14日 2号墳は石組の写真撮影をおこなう。3号墳は墳丘断面実測を終え、埋めもどしをおこなう。3~5、8~11地点の断面実測をおこなう。

3月15日 2号墳は石組の実測をおこなう。その他各地点の断面実測をつづける。

3月16日 2号墳の墳丘測量を補足する。

3月17日 2号墳の埋めもどしをおこなう。器材等を撤収し、第1次調査に関する現場作業を完了する。

第2次調査

1973年(昭和48)年1月25日 調査資材を現地へ運び、現場の設営をおこなう。

1月26日 2号墳は1次調査トレンチの埋め土を取除き、あわせて西側トレンチを拡張する。排水溝を

もった横穴式石室であることを確認。3号墳は雑木を伐採する。

1月27日 2号墳は遊離した石材を取除く。3号墳は1次調査の西側にトレンチを入れる。円筒埴輪2本検出。

1月28日 2号墳は石室内を精査し、併せて写真撮影用の櫓を組む。3号墳では埴輪の破片が散乱状態であらわれる。壺形埴輪1個を検出。

1月29日 2号墳は、排水溝を精査した後、石室の写真を撮影する。3号墳は埴輪の散乱状態を撮影し、実測する。併行して斜面にトレンチを入れる。社会教育課坂田課長ら視察にみえる。

1月30日 2号墳は石室実測の割りつけをおこなう。3号墳は埴輪片を収納する。

1月31日 2号墳は石室の実測をおこない、併行して墳丘上にトレンチを入れる。

2月2日 2号墳の石室実測を完了し、資材を撤収する。

2月8日 2号墳の石室の移築作業をおこなう。石材の一部を太田黒田遺跡調査室へ搬入する。

2月9日 残りの石材を搬入し、2次調査に関する全ての現場作業を完了する。

〔註〕

① この調査でわれわれのとった方法について説明しておこう。最近の各地で継起されている各種の土木工事などによる現状変更に伴ういわゆる事前調査では、一定の広い範囲にわたってその中の全ての遺跡を調査する必要にせまられている。このような場合調査計画を立案するために分布調査がおこなわれるが、その結果は遺跡の実態とくらべて極めて不十分な場合が多い。つまり地下に埋没した遺構を伴う遺跡の場合地表面での観察だけでは遺跡の規模や性格を把握することは困難である。また丘陵上にある古墳群の場合樹木が繁茂している状態ではとくに小封土の墳丘を見落すことが多いであろう。このように踏査と聞き込みによる分布調査に基いた遺跡の把握には限界がある。したがって分布調査の結果に基いて当初から発掘調査を開始することは遺跡の性格によってはその調査自体が極めて不徹底不十分なものになることが予測される。また遺跡の保存についても工事計画が完成した段階ではその変更の要求が認められることは少ない。このような状況にあって綿密な調査と遺跡の保存への展望を見出すための一つの方策として、われわれは該当区域全域にわたって遺跡の範囲とその性格を知るための試掘を具体的な工事計画の立案やそれに伴ういわゆる事前調

査に先立っておこなうべきことを実行した。この調査はあくまで予備調査であって、この結果に基づいて改めて本調査の必要の有無やその規模・内容さらに保存問題などが討議立案されるべきものであると考える。今回の調査についていえば、第1次調査はその大部分が

予備調査の性格をもっている。

なお、丘陵下方の方墳などを含む区域を今回の造成工事の範囲から除くこと、また1号墳の墳丘を公園敷地内に残すことが工事施行者との協議で決定した。

(森・大野)

第2章 古墳群の位置と環境

和歌山市の平野域は、その間を紀伊水道へ向って西流する紀の川によって二分されており、その兩岸にはそれぞれ広大な山脈が河川と平行して走っている。雨ヶ谷古墳群は、この右（北）岸にある和泉山脈から南側へのびた一つの尾根上にある。現在の行政区画では和歌山市楠見地区（大谷・善明寺）にあたる。さらに細かく付近の地形をみると（図2）、現在の大谷から西善明寺の集落の北側ではこの大きな尾根がさらに平野部へむかって四つの支脈に分れている。その東側の3本の尾根が今回調査した範囲である。ただし中央の尾根はすでに土取作業によって削平されていた。これらの尾根は、海拔35~80mの高さであるが、今回調査した尾根は海拔50~70mあり、支脈中でも比較的高い位置にある。したがって尾根の上からは紀の川左（南）岸の日前宮平野から河口にかけての平野域や、南方の龍門山脈を見渡すことができる（図版第1）。

紀の川右（北）岸には各時期の遺跡が点在しているが（図1）、ここでは雨ヶ谷古墳群の東西の丘陵上にあるいくつかの古墳、つまり大谷古墳・晒山古墳群・

鳴滝古墳群と、丘陵下の平地にある楠見遺跡について概観してみよう（図2）。

この地域で最も早く調査されたのは丘陵西南端にある大谷古墳であった。大谷古墳は西南に前方部をむけた前方後円墳で、1957（昭和32）年に和歌山市教育委員会によって調査された。埋葬施設としては、後円部にやや特殊な組み合わせ式家形石棺を直接埋納していた。副葬品は棺内から武器類・武具類・玉類・金銅製装飾品類など、棺外から馬具・武器類などが検出された。鉄製の馬甲や馬冑に代表されるように、きわめて外来的な要素の強い副葬品をもった古墳である。大谷古墳のある尾根のやや東北寄りの尾根上には晒山古墳群がある。1基の前方後円墳と9基の円墳からなりそ

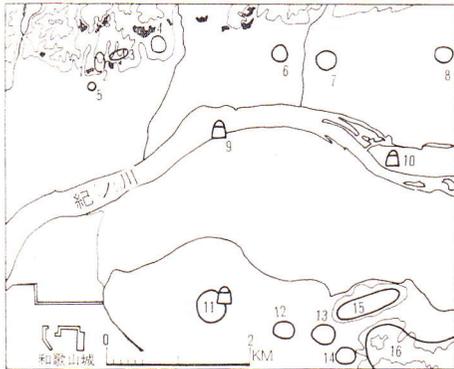


図1 雨ヶ谷古墳群の位置と周辺の主な遺跡

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 大谷古墳 | 2. 晒山古墳群 |
| 3. 雨ヶ谷古墳群 | 4. 鳴滝古墳群 |
| 5. 楠見遺跡 | 6. 六十谷遺跡 |
| 7. 直川遺跡 | 8. 府中遺跡 |
| 9. 有本船渡（銅鐸） | 10. 紀伊砂山（銅鐸） |
| 11. 太田黒田遺跡（銅鐸） | 12. 秋月遺跡 |
| 13. 鳴神遺跡 | 14. 鳴神Ⅱ遺跡 |
| 15. 岩橋千塚（花山） | 16. 岩橋千塚（岩橋前山） |

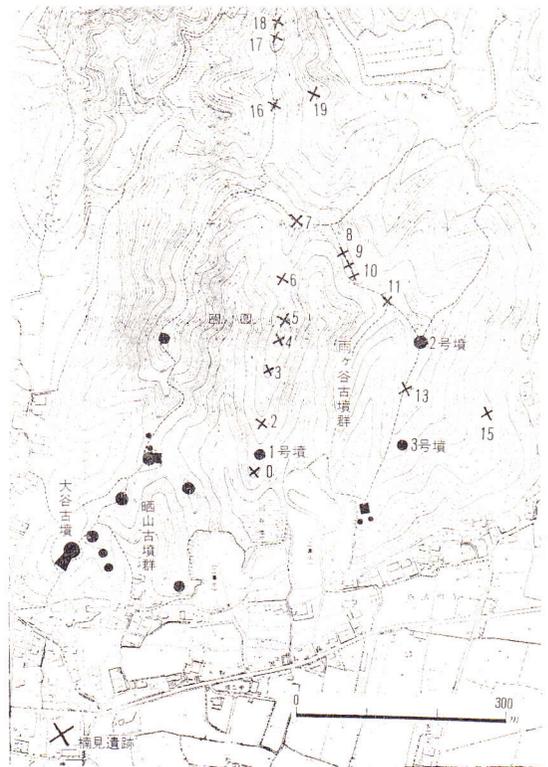


図2 雨ヶ谷古墳群の分布と付近の遺跡
×印0~19は試掘した地点

のうち9基が1968(昭和43)年に和歌山市教育委員会によって調査された。その中で内容の詳しくわかるものをみると、1号墳は円墳で埋葬施設は粘土槨で、鉄製武器類・玉類を副葬している。2号墳は前方後円墳で、三つの埋葬施設をもち、いずれも木棺直葬である。須恵器などを副葬している。4号墳は円墳で古式の横穴式石室をもち、須恵器・玉類を副葬している。全般的にみて、5世紀前半から6世紀後半にかけての長い時期にかけて築造された古墳群である。

これらの尾根から善明寺の集落のある谷をへだてて東側の小独立丘陵上には鳴滝古墳群がある。5基の古墳からなり、そのうち3基について1965(昭和40)年に和歌山県教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。第1号墳は円墳で埋葬施設は横穴式石室である。玄室・玄室前道・羨道・羨道前庭からなるいわゆる「岩橋形」の横穴式石室で石棚が架設されている。副葬品には鉄製武器類・馬具・玉類・須恵器がある。第2号墳は両袖式の横穴式石室をもつが、墳形は明らかでない。副葬品としては金銀環・鉄製武器などがある。第5号墳は正方形の玄室をもつ横穴式石室をもつが、墳形は明らかでない。全体として6世紀中葉からそれ以降にかけて築造された古墳群である。楠見遺跡

は晒山古墳群のある丘陵下の平地にあり、1969(昭和44)年に和歌山市教育委員会によって調査がおこなわれた。包含層から多くの陶質土器や土師器が検出された。陶質土器には壺・器台・台付鉢・甌・杯・高杯などがあり、いずれも外来的な形態を備えている。5世紀代の年代が与えられている。(大野・清水)

〔註〕

① 樋口隆康・西谷真治・小野山節『大谷古墳』和歌山市教育委員会 1959年

② 齋田香融・網干善教・河上邦彦・奥田豊『和歌山市における古墳文化』関西大学文学部考古学研究紀要第4冊 1972年

③ 樋口隆康・近藤喬一・吉本堯俊『和歌山市鳴滝古墳群の調査』和歌山県文化財学術調査報告第2冊 1962年

④ 本年、鳴滝古墳群のある丘陵のさらに上方で、2基の円墳が確認され、和歌山県教育委員会によって調査された。埋葬施設は礫廊および木棺直葬で5世紀末から6世紀初頭にかけての築造と考えられている。

⑤ 註②に同じ。

第3章 各古墳の調査

1 号 墳

位置と外形 雨が谷1号墳は、北より南にのびる雨が谷丘陵の南端部、標高約44mに位置し、麓の平地との比高差は約30mである(図3)。南方には紀の川およびその流域の平野を眼下に見おろす景勝の地に営まれている。調査前の観察では、墳頂部付近は後世において削平を受けたらしく、墳丘はほとんど認められず古墳と判断できないほどであった。調査によって、墳丘の東北裾部から大甕などの須恵器群にともなう掘り込みが検出され、これをもとに地形測量図を検討した結果、直径約8mの円墳であることが推測できた。墳丘の高さは、古墳が傾斜面に営まれているため測定位置によって変わるが、墳丘裾部に据えられていた大甕の底部からでは約1.2mを測ることができ、本来はこれより高かったものと考えられる。なお、埴輪列、葺石等の存在は認められなかった。

墳丘の断面観察 1号墳の土層は墳丘断面図に見られるように、基本的には4層にわかれる。(図5・6)上から表土層(腐植土)、黄灰色土層、暗灰褐色粘

質土層、明灰褐色粘質土層で、このうち明褐灰色粘質土は雨が谷丘陵の地山の土である。また、暗褐灰色粘質土の上面は古墳築造前の旧地表で、その上の明黄灰色土は古墳の盛土およびその流土であるとともに、この丘陵の地山が風化した土であると考えられる。つまり、地山の風化土を用いて墳丘を築いたのである。これは砂質に近い土であるため、墳丘が築かれたのちおそらくかなり短期間のうちに封土の多くが流失したものと推測できる。ただ、本来なら盛土と流土との差は明確に示されるはずであるが、今回の調査では肉眼で区別できないほど同一色調であり、土質も似ていたため、その差を検出することはできなかった。ただ、図5でわかるように、棺の南約3mと北4mのところに暗灰褐色粘質土の若干の落込みが検出できた。これは自然地形の単なる傾斜のようにもみえるが、北側の落ち込みは墳丘裾部の掘り込みとほぼ同じ位置にあたるため(図7)、古墳築造に際し旧地形を削り整形したものと考えられる。このことから、これらの傾斜をもとに本来の盛土と流土の境をほぼ推定できよう。

埋葬施設 墳頂部やや南寄りのところから、東西に

主軸をおく木棺を直葬したと考えられる施設が検出された(図4)。先にもふれたように、封土の著しい流失と後世の削平のため木棺直葬の施設の基底部分のみ遺存していたと考えられ、木棺の痕跡は検出できたが、木棺にともなつたと思える墓壙の輪郭を明らかにすることはできなかった。木棺はその痕跡から組合式木棺であると推定され、主軸をN80°Eに置く。その規模は長さ260cm、上端(下端)の幅は東側で55(45)cm、中央部で70(55)cm、西側で70(58)cmを測る。木棺は墳丘断面図にみられるように暗褐色灰色粘質土を掘り込んで据えられており、その上面からの深さは東側で10cm、中央部で15cm、西側で22cmを測る。棺底はほぼ水平になっている。棺内東北部には、150×30cmの範囲にわたり明黄灰色粘土の堆積が2~3cmの厚さで棺底で検出され、その上面には一部に赤色顔料がうすく残存していた。

遺物は、棺内西部で須恵器壺1、罌1、滑石製白玉1が棺底に一括して置かれ、棺内東部の赤色顔料を含む明黄灰色粘土の上に鉄製刀子1が先を西に向けて置かれていた。棺側南西部では現地表下約10cmで須恵器杯身2、杯蓋2、無蓋高杯1が一括して置かれており、これらは棺底より約20cm高い位置にあたる。また、須恵器杯身2片、杯蓋2片は棺の直上にあたる位置から出土したが、先に述べたようにこの付近は後世に削平されているため、これらの破片はその際に原位置を動かされた可能性が高い。そのため、これらの棺外遺物はすべて本来は棺側の南西部に一括して置かれていたものと考えられる。この棺外遺物の位置から墓壙の輪郭をある程度は推定復原することができるようである。



図3 1号墳墳丘測量図

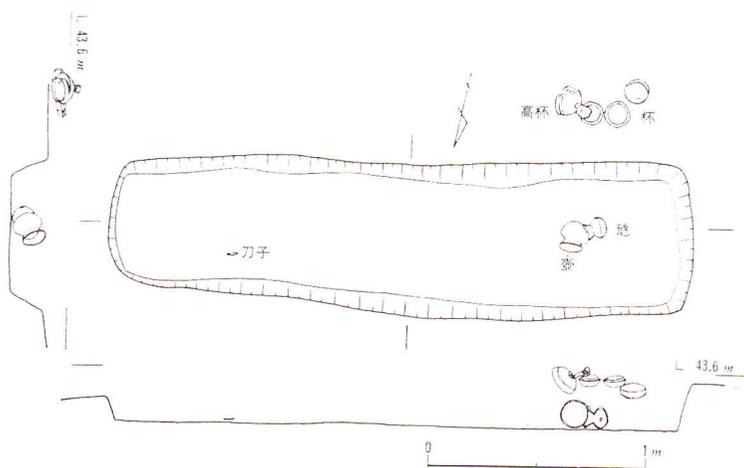


図4 1号墳の埋葬施設と遺物の位置

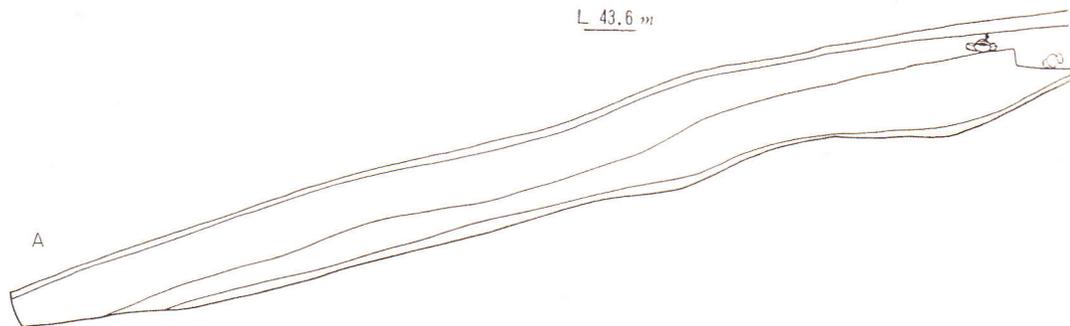


図5 1号墳墳丘断面図（南北方向）

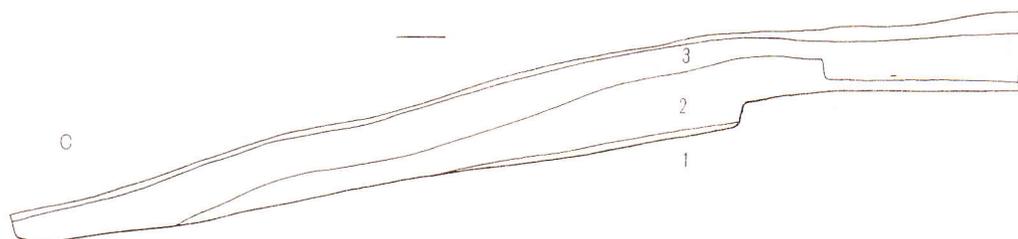


図6 1号墳墳丘断面図（東西方向）

墳丘裾部の遺構 墳丘の東北裾部から、墳丘を取り巻くような掘り込みが長さ約5m、幅約1.5m、旧地表からの深さ40~50cmの規模で検出されている（図3）。これは墳丘南北断面図（図7）で見られるように、暗褐色粘質土層の上面つまり古墳築造当時の旧地表面から掘り込みがはじまっており、古墳の築造と時期をほぼ同じくしてつくられたものと考えられる。この掘り込み内からは、須恵器大甕1、壺2、短頸壺1が出土した（図8）。これらは掘り込み内の堆積土である黄褐色土中よりおもに検出されており、本来は掘り込みの底に置かれていたものと考えられる。大甕は底部を穿孔されたのちに、掘り込みの底の地山に大甕とほぼ同じ大きさの穴を掘って据えられた状態で底から約30cm上が原位置を保って出土しており、当初はおそらく完

形で胴部から上のほとんどの部分が地表に出ていたものと推測できる。その他の須恵器も大甕のすぐ近くから破片の状態で出土したが、それら独自の据え穴は認められなかった。ただ、短頸壺は完形の状態で出土している。これらの遺物は棺底より約50cm下のレベルで棺中央部より約4.5m離れた位置にあたる。

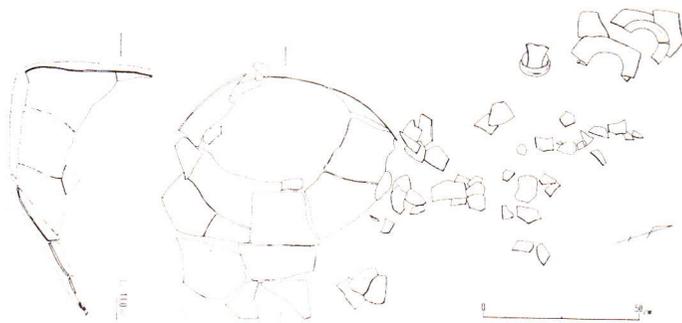


図8 1号墳墳丘裾部掘り込み内の須恵器出土状態（左大甕、右上壺）

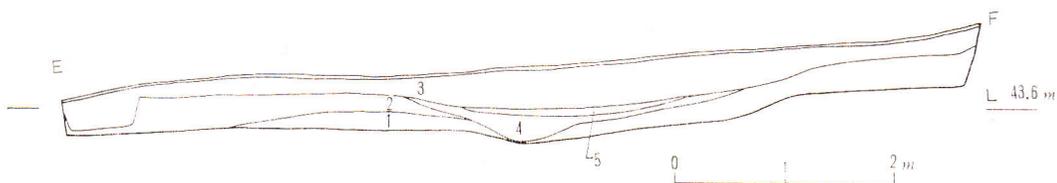
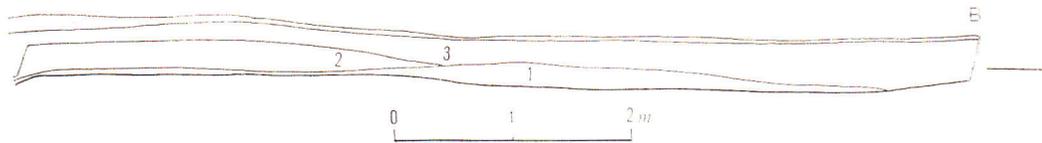


図7 1号墳墳丘断面図（墳丘裾部の掘込みと木棺）

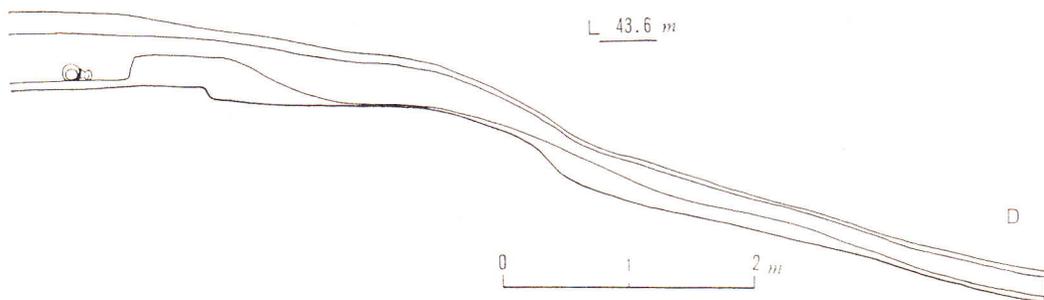
1. 明灰褐色粘質土 2. 暗灰褐色粘質土 3. 黄灰色土 4. 黄灰褐色土 5. 暗灰色土



1. 明灰褐色粘質土 2. 暗灰褐色粘質土 3. 黄灰色土

調査当初、この掘り込みは尾根を切って墳丘と自然の尾根を区別する意味でつくられたものと考えていたのだが、墳丘測量図でもわかるように途中で完結しているため、その目的は果されていないように思える。

そうするとこの遺構は大甕をはじめとする須恵器を置くことを主目的としてつくられたものと推定できよう。



1. 明灰褐色粘質土 2. 暗灰褐色粘質土 3. 黄灰色土

遺物 1号墳の埋葬施設内および墳丘上から出土した遺物は次のとおりである。

棺内

- 須恵器壺 1個
- 須恵器罍 1個
- 滑石製白玉 1個
- 鉄製刀子 1個

棺側

- 須恵器杯身 4個
- 須恵器杯蓋 4個
- 須恵器高杯 1個

墳丘裾部

- 須恵器大甕 1個
- 須恵器壺 2個
- 須恵器短頸壺 1個

墳丘内および墳丘上

- 弥生式土器片 若干
- 須恵器片 若干

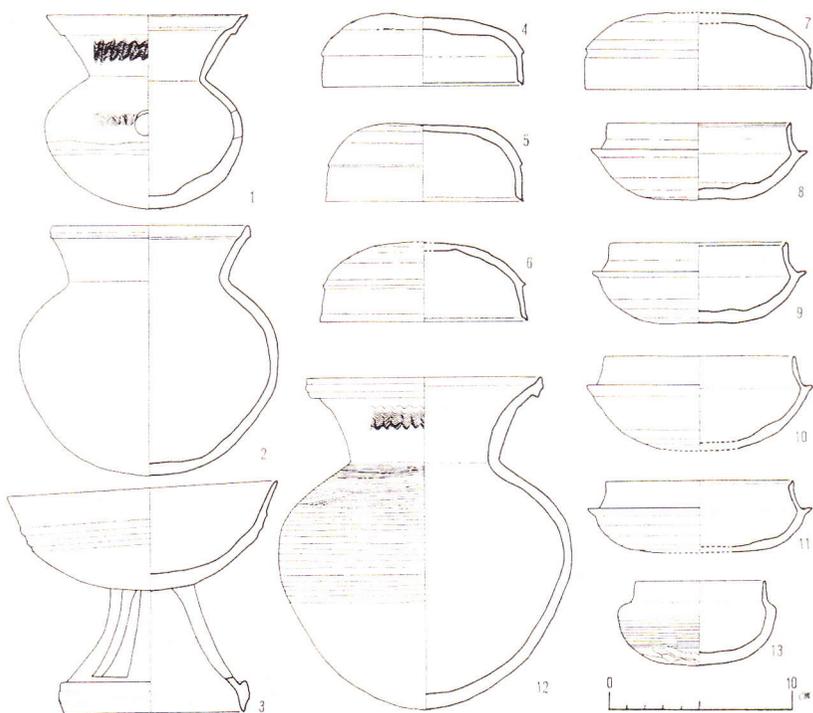


図9 1号墳出土の須恵器実測図

棺 内

須恵器壺（図版第6・図9・2）口頸部から肩部にかけて自然釉が認められる。整形は、底部には格子目状印文がかすかに残存しているが、口頸部および胴部は横ナデによって丁寧に仕上げられている。口頸部は外反し、口縁部との境には段がみられ口縁部には浅い沈線が1条めぐり、先端はやや尖っている。

罽（図版第7・第9図1）内外面の半分ほどは自然釉がかかり暗い緑色を呈する。口縁部と頸部の境は明瞭な段がつき、強く外反した口縁部の上端は面をなしている。口頸部には全面に櫛描波状文が施されている。また、胴部には径1.5cmの円孔があげられ、約1cm幅の櫛描波状文がめぐり、その下部にはやや浅い沈線が数条見られる。

滑石製白玉（図10・2）径5.5mm、厚さ3mm、孔の径2mmで緑灰色を呈している。

鉄製刀子（第10図1）刃の先端部と茎の一部が尖なわれている。現存長3.8cm、刃の現存長2.1cm、刃の幅1.3cmで刃部の断面はV字状になっている。

棺 側

須恵器杯（図版第7・図9・4~11）杯身はたち上りが途中からはほぼ垂直になっているもの（8・9）と、やや内傾するもの（9）と、面をなすもの（8・11）と、丸く仕上げられているもの（8・11）とに区別できる。受け部はいずれも水平に外へ延び、U字状の浅く細い溝がつくられている。杯蓋は天井部と口縁部を

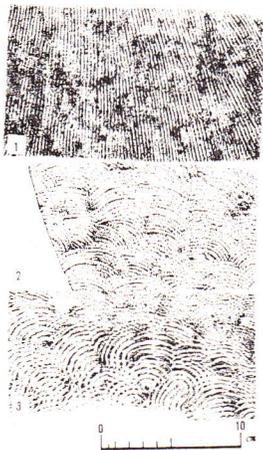


図12 須恵器大甕胴部の印文
1. 表面 2. 裏面
3. 裏面（底部付近）

わける稜がはっきり残っているもの（4・5・6）とあまり顕著でないもの（7）とにわかれる。また口縁端部は、段がつき沈線の入るもの（4）と、沈線のみもの（5・6）と、面をなすもの（7）とがある。

須恵器高杯（図版第7・図9・3）無蓋高杯で全面にわたってナデ仕上げの痕跡が残っている。杯部は残く口縁部と底部は2条のふい突線によってわ

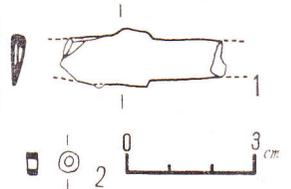


図10 1号墳 白玉と刀子

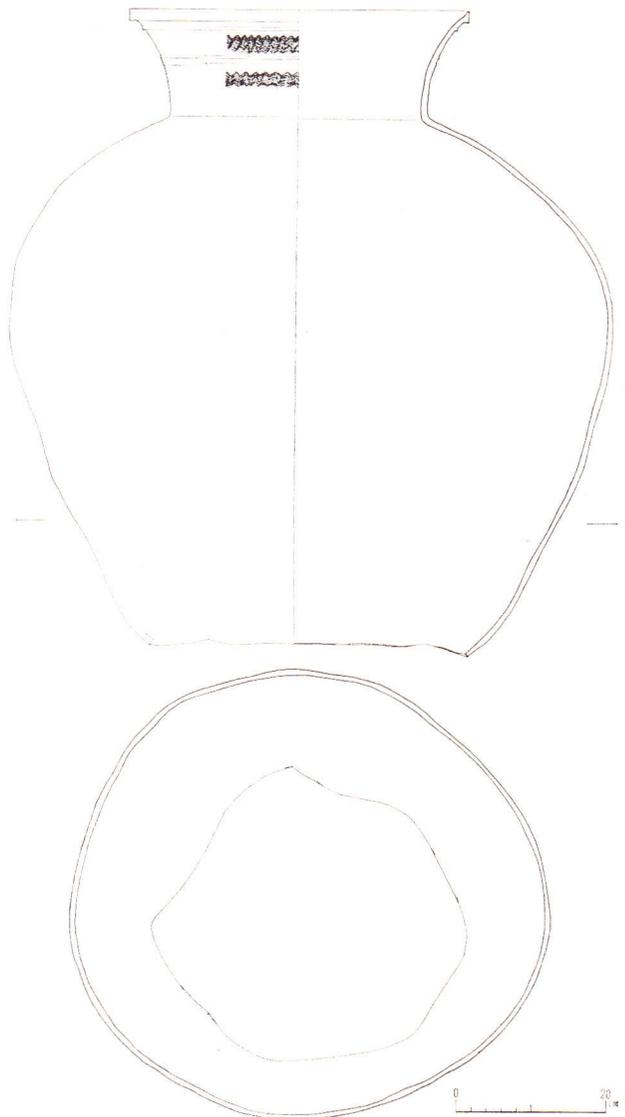


図11 1号墳 底部に穿孔のある須恵器大甕実測図

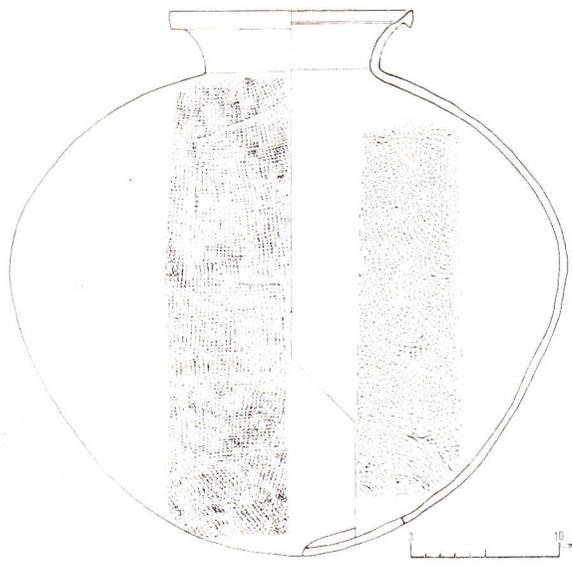


図 13 1号墳填丘裾部の須恵器壺実測図



図 14 1号墳填丘内と墳丘上採集の土器実測図

けられ、口縁部は外上方にひろがり、端部はまるく仕上げられている。脚部には長方形の透しを1段四方につけ、脚部と基底部の境にははっきりした段がみられる。

墳丘裾部

須恵器大甕(図版第6・図11) 口頸部および胴下半部は黒色、肩部は灰白色を呈している。胴の外表面は格子目状の叩文が一面に施されており、内面には青海波状の叩文が全面にみられ、その大部分はほぼ磨り消されている(図12)。肩は大きく張り、均齊のとれた器形である。口頸部と口縁部との境には明瞭な段がつき、口縁上端は鋭く尖り外周は平らな面をなし、下に垂れている。口頸部には櫛描きの波状文帯が2段めぐっており、その上部にはかなり突出した1条の突線、中間に2条の突線がついている。底部には、約42×39cmの不整形の孔が穿たれているが、焼成後にあけられたものである。孔がかなり大きいため、底部のほとんどは失なわれている。

穿孔のある須恵器壺(図版第6・図13) 球形の胴に小さな口頸をつけ、肩は上部で大きく張っている。胴の外表面には格子目状の叩文が一面に施されており、上半部ではさらに櫛状の施文具による横方向のかき目によって仕上げられている。内面は青海波状の叩文が

全面に残っているが、一部では磨り消そうとした痕跡が認められる。口頸部はナデ仕上げで口縁と頸部の境にははっきりした段が残っており、口縁の上端部は鋭く尖っている。底部には、大甕と同様焼成後にあけられた約8×1.5cmのほぼ円形の孔が見られる。この孔は穿孔後に孔の縁の器壁を整えている。

須恵器壺(図版第7・図9・12) 胴の外表面は全面にわたって格子目状の叩文が施され、上半部のみさらに櫛状の施文具によって整形が加えられている。内面には青海波状の叩文がみられるが、胴部の叩文の方向と底部のそれとははっきりちがっており、胴部の叩文は磨り消した痕跡がうかがえる。口頸部はナデによる仕上げで、櫛描きの波状文が1段めぐっており、その上端部は器面に深く刻まれている。口縁部には1条のふい突線がみられ、口縁上端は鋭く尖っている。

須恵器短頸壺(図版第6・第9図13) 口縁部から肩部にかけて自然釉がかかっており、底部にはヘラ削りのあとがはっきり残っている。胴部は浅い平行の沈線がめぐっている。かなり張った肩をもつ体部から短い頸部がほぼ垂直にたち上っており、その上端は丸くおさまられている。

墳丘内および墳丘上

墳丘裾部の須恵器大甕付近の墳丘盛土中から弥生式土器の口縁部が出土した。表面はかなり磨滅しているが弥生時代中期のものと考えられる。(第14図1)また腐植土中より、須恵器杯蓋の口部破片が採集されている。これは灰白色を呈しナデ仕上げの痕跡が認められ、畿内の須恵器編年によれば6世紀末頃のものと考えられる(図14・2)。

小 結 雨が谷1号墳は先に述べたように、封土の著しい流失と後世の削平とによってかなり墳丘の様子が変えられているが、丘陵先端部の好条件のところを占地しており、しかも墳丘築造時に旧地表を削って整形している可能性があること、埋葬施設が盛土の下に旧地表に掘り込んで据えられていることなどから築造当初から盛土は案外少なかったものと考えられる。

また、木棺内から厚さ2~3cmの明黄灰色粘土の堆積が検出されているが、これはその上面に赤色顔料の痕跡が認められ、しかも鉄製刀子も出土しており、棺底のレベルで検出されていることから、晒山2号墳前方部第1・第2埋葬施設で見られるような棺の上面に置かれたものとは考えられない。また棺底に敷かれていたということも、堆積がせいぜい2~3cmの厚さしかないことからその可能性は薄い。おそらく木棺が残存している時期に木棺の腐朽にともない自然に堆積し

たものと考えられる。

墳丘裾部において底部を穿孔された大甕・壺をはじめとする須恵器群が検出されているが、これらは何らかの祭祀的な性格を持ったものと考えられる。ただ、これらの須恵器の置かれた時期であるが、これに伴う掘り込みが墓域あるいは聖域を画する意味をも持つものと考えられるならば、おそらく、墳頂部における埋葬およびそれにとりなす祭祀行為がすべて完了した後に墳丘の裾部に掘り込みをつくり、これらの須恵器を置いたものと考えられる。これらのうち、大甕は独自の掘り穴に据えられ胴下半部が原位置を保った状態で出

土しているが、茨城県大生西第1号墳(2の例にも見られるように、当初はほぼ完形の状態で据えられていた可能性が強い。ただ、他の壺2個は出土状態の図・写真でもわかるように、その破片が散乱しているため、あるいは作為的に砕いて掘り込み内に置かれた可能性もある。その場合には、墳丘裾部において須恵器を用いておこなわれた祭祀行為も、あまり持続性のあるものではなかったと考えられる。

最後に1号墳の築造された時期であるが、棺内・棺側・墳丘裾部から出土した須恵器を畿内の須恵器編年にあてはめた場合、5世紀の後半と考えられる。

表1 1号墳出土須恵器計測表 (単位cm)

器形	出土位置	挿図番号	口径	器高	胴口径	焼成	その他
壺	棺内	9-2	10.7	13.7	14.1	良好	胎土良好, 青灰色
罍	"	9-1	11.0	10.6	11.4	"	"
杯身	棺側	9-8	10.0	4.3		やや不良	胎土に砂粒多, 灰白色
"	"	9-9	9.7	4.5		"	軟質, 灰白色
"	"	9-10	(10.4)	5.2		良好	胎土良好, 青灰色, 約 $\frac{1}{4}$ 残存
"	"	9-11	(10.3)	4.0		"	胎土に砂粒多, 青灰色, 約 $\frac{1}{4}$ 残存
杯蓋	"	9-4	11.0	4.0		やや不良	胎土に砂粒多, 灰白色
"	"	9-5	11.0	4.3		普通	砂粒多, 灰白色
"	"	9-6	(11.4)	4.4		"	砂粒多, 灰白色, 約 $\frac{1}{4}$ 残存
"	"	9-7	(12.4)	4.2		良好	砂粒多, 青灰色, 約 $\frac{1}{4}$ 残存
高杯	"	9-3	14.8	12.2		普通	砂粒多
大甕	墳丘裾	11	45.2	85.0	80.2	良好	底部穿孔, 本来の器高はさらに高い
壺	"	13	16.5	36.9	37.6	"	底部穿孔, 青灰色
壺	"	9-12	12.8	18.1	16.0	普通	口部若干欠
短頸壺	"	9-13	7.1	4.6	8.6	良好	黒みを帯びた青灰色

〔註〕 ① 8頁註②に同じ。

② 大場磐雄・編『常陸大生古墳群』 1971年

() 内の数字は復原値

(千賀)

2号墳

位置と墳丘 2号墳は東側の尾根上の最高所、海拔約78mのところろに位置する。雨が谷丘陵の麓の平地の海拔は10m弱であるから、比高が約70mの高所にある。調査前は松や雑木が叢生しており、明瞭な墳丘は観察できなかった。地形測量図(図15)をみると、南に前方部を向けた前方後円墳が尾根上に存在するようではあるが、埋葬施設がくびれ部に相当する部分にあることと、トレンチの断面観察によって墳丘の盛土がほとんど流失していることがわかり、本来の墳形はわからない。とくに、前方部状にゆるやかに南へ延びている部分は、トレン

チ②および③の断面図(図16)によると、すでにこの部分で地山が現地表下約40cmまで落ち込み、その上に薄い腐植土層が堆積している。この腐植土層は旧地表面と考えられ、その上の堆積は混在しているものからしても極めて新しい時期の堆積である。なお、埴輪片などは検出されなかった。

埋葬施設 この古墳の埋葬施設は西面した横穴式石室である(図18)。石室はトレンチ①の断面図(図17)



図16 2号墳第2第3トレンチ西壁断面図

で示すように、すでに2回の盗掘を受けており、石材はほとんど持ち去られ、一部は玄室の床面に散乱していた。これらの盗掘の時期を示す遺物はみられなかった。石室墓底部の石材はほとんど元の位置を保っており、平面形を知ることができた。全長1.5mあり、さらに約3mの排水溝がつくられている。玄室および羨道部は地山(黄灰色混礫土)を約40cm掘り下げて、2.5m×2mの凸字形の墓壙を掘り、その中に構築している。石材は緑泥片岩系の割石を用い、横積みと木口積みを併用している。玄室の幅は奥壁で1.55m、長さは中央で85cmある。北67度西の方向に開口している。側壁が残っている部分でみると、床面から約30cm上までは、ほぼ垂直である。奥壁の左右の外側にはそれぞれ三角形の割石がおかれている。この石は玄室の中からは見えず、根詰の役割をはたしているものかもしれない。羨道部側ではこのような石はみられなかった。

石室墓壙の掘削土の中から3~5cmの円礫が多数検出されており、玄室床面には円礫を敷いていたと思われる。また、玄室左袖部や奥壁右隅には青灰色粘土がみられた。

玄室と羨道との間には、小規模な玄室前道が設けられている。幅45cm、長さ38.5cmある。玄室前道基石には、長さ130cm、厚さ16cmの緑泥片岩系の巨大な割石を用い、右袖の部分は割石を2段積みにしてこれを補っている。この基石の上に、これも大きな割石を積んで、その間に小割石を詰めて左右の袖をつくっている。

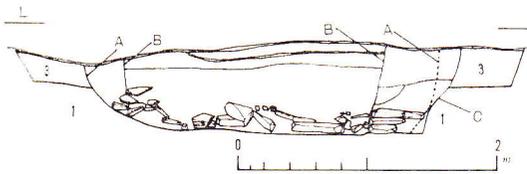
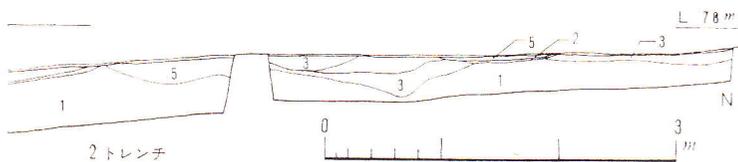


図17 2号墳第1トレンチ西壁断面図
(1.黄灰色混礫土(地山) 3.黄灰色土)
(A・Bは盗掘坑, Cは墓壙を示す)



1.黄灰色混礫土(地山) 2.灰褐色粘質土 3.黄灰色土 4.暗黄灰色礫層 5.灰色土

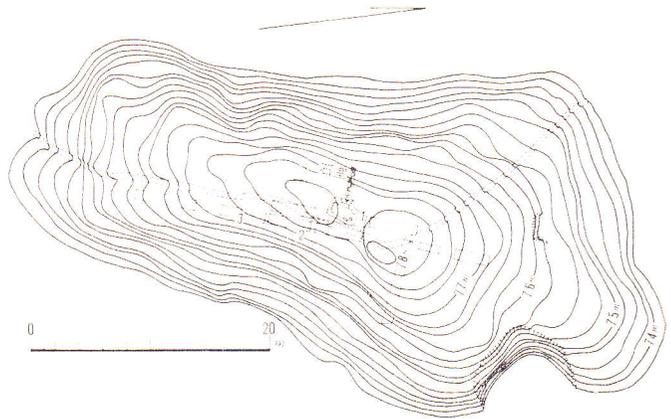


図15 2号墳 墳丘測量図(1・2・3は各トレンチを示す)

る。右袖の方が長い。左袖で基石上から約30cmの部分が残っている。

羨道は長さ27.5cm、幅75cmと短い。高さは約40cmの部分が残っている。この部分では側壁はほぼ垂直である。下から約25cmまでは小割石を積み、その上に長さ30~40cmの大きな割石を木口積みしている。上部では石の間に詰めた青灰色粘土がみられた。床面には玄室前道基石に接して幅15cm、厚さ4cmの板石を2枚継ぎに敷き、左側壁側ではその上に扁平な礫を敷いている。玄室前道、羨道は玄室に対して直角でなく、やや左にふれている。したがって玄室に対して直角にとれば、開口方向は北59度西方向となる。

排水溝は、玄室前道から始まり、一端は玄室内部に入っている。全長は3.52mあり、羨道から外側は2.73mある。玄室から羨道にかけては、幅約40cm、深さ約8cmに浅く地山を掘りくぼめ、さらにその中に幅約15cm、深さ約7cmの浅いU字溝を掘り、このU字溝の中に長さ20~40cmの長い割石をV字形あるいは▽形にて、その上を板状割石で覆っている。この部分の長さまたは約80cmある。羨道部より外側は、地山をU形に幅25cm、深さ30cmに掘り、その中に割石を詰め込んでいる。最上部の蓋石は横にならべ置かれているが、蓋石を含めてはほぼ3段になっている。最下段は割石を石材の節理方向にたてて1列に置き、その上にはほぼ2列にわたって同じく縦に置いている。これらの石材はいずれも長さ30~50cm、厚さ数cmと比較的大きい。石の置き方は、まず最下段を上方からならべ、ついで中段さらに最上段の蓋石を同様のならべ方をしたと考えられる。

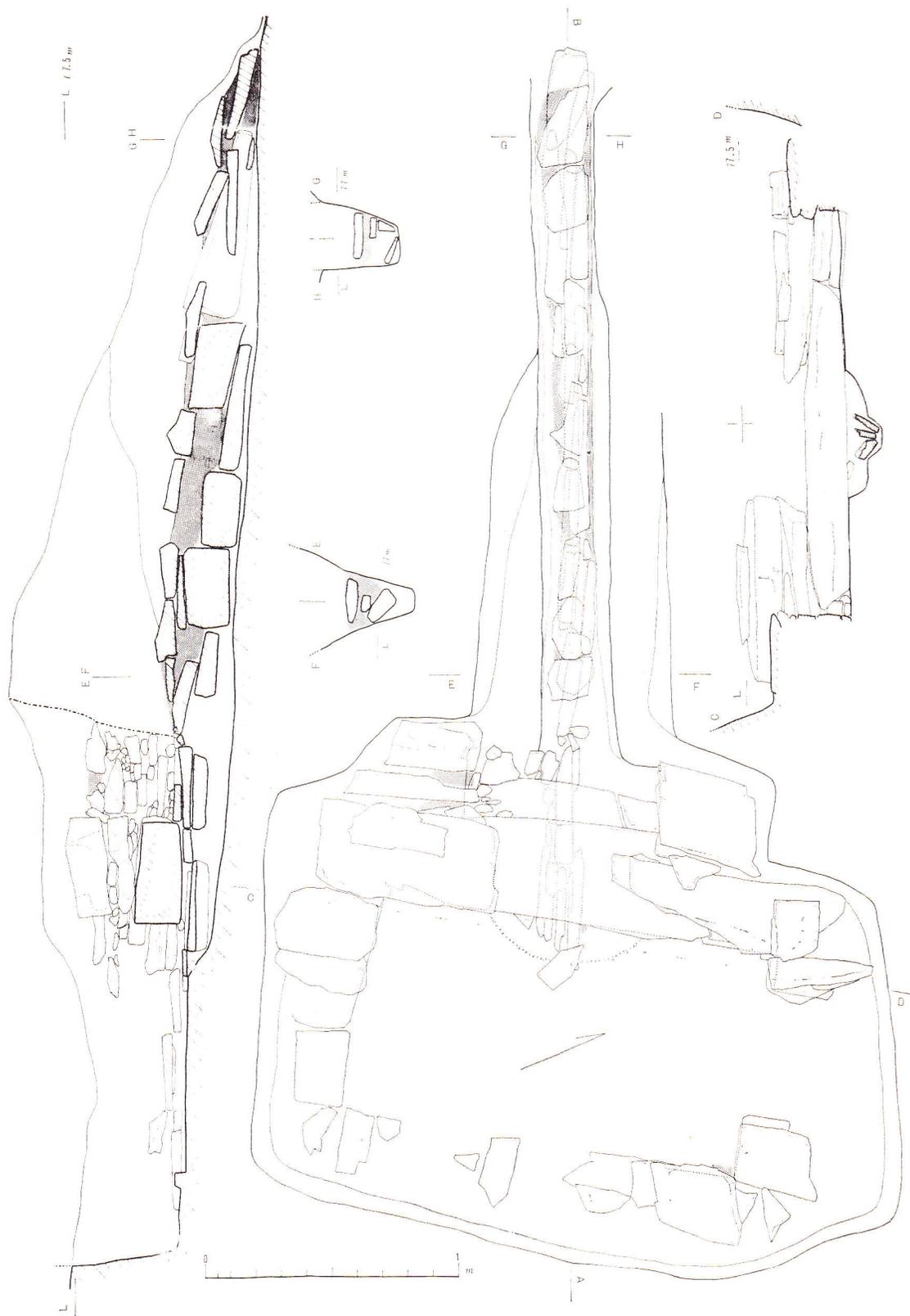


図 18 2号墳 横穴式石室実測図 (網目は青灰色粘土を示す)

蓋石の間から上面にかけては青灰色粘土が認められ、この粘土は蓋石の下にもみられた。排水溝の底は空間のある部分もあるが、多くは最下段の石材が底と接している。排水溝最末端と玄室床面との高低差は約33cmある。

遺物 第2号墳の石室および墳丘から出土した遺物は次のとおりである。いずれももとの位置は動いていた。

小玉	1個	
鉄鍬破片	6個	
刀子破片	1個	
直刀破片	1個	
その他鉄器破片	5個	
須恵器破片	2個	(以上石室)
弥生式土器片	若干	(墳丘)

小玉(図19) 紺色のガラス製小玉で、直径9mm、厚さ7mm、孔の直径3mmある。やや扁平な円形で、上下は平坦である。内部には気泡とみられるものが混っている。

鉄鍬(図20) (4)は平根式鍬の先端部で幅3.2cm、厚さ4mmある。他の鉄器が錆着しているようである。(5)~(9)は長頸式鍬の基部で(9)には矢柄の木質とその上に巻いた樹皮がのこっている。(5)・(6)は茎の先端部でやはり木質がわずかにのこっている。断面はいずれも矩形である。

刀子(図20・3) 先端から3.3cmの部分がのこっている。幅1cm、峰の厚さ3.1mmある。

直刀(図20・1) 刀身の先端に近い部分6cmがのこっている。幅2.5cm、峰の厚さ9mmある。

不明鉄器(図20・2・10~13) (10)は厚さ4mmの鉄板で、図で左下にあたる部分は本来の面にのこしている。表面には黒色の漆をかけているようである。甲の小札の可能性がある。(11)は現存する長さ3.2cmの破片で、図で下にあたる部分は欠損している。断面で見ると、直径3mmの円棒を厚さ1mmの小円筒の中に挿入している。小円筒には細い糸を巻きつけている。(12)は幅2.5cm、厚さ4mmの小さな板状で、図で上にあたる部分は欠損している。他の鉄器が錆着している。(13)は幅2.4cm、厚さ4mmある。刀子の破片の可能性もある。(14)は円弧を描く金具の部分で、小さな鉄が3個あり、中間の鉄の周辺には金張りがわずかにのこっている。馬具の破片かと思われる。

須恵器(図21・1・2) (1)は杯蓋の小片である。復元径16cmある。口部上端内側にはわずかに稜がある。内外面ともに仕上ナデによっている。胎土・焼成

ともによい。(2)は杯身の破片で、復元径12.4cmで、かえりはやや内傾している。稜はない。胎土はやや砂質である。

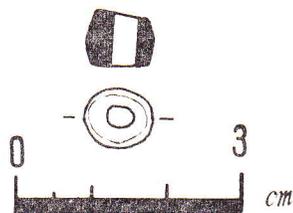


図19 2号墳出土の小玉

弥生式土器片(図21・3) 甕の底部である。胎土は細かい砂粒を含み、焼成はわるい。後期の土器である。

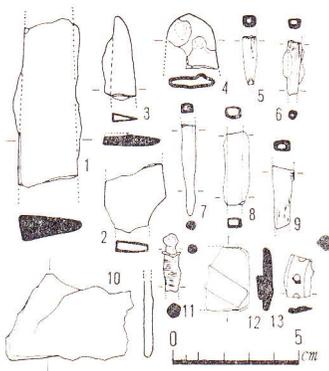


図20 2号墳出土の鉄器

小結 これまで述べたように2号墳は横穴式石室をもち、墳形はおそらく円墳であろう。石室は、玄室の大きさ1.55×0.85mと小型で、羨道もこれに従ってきわめて短い。このような規模では被葬者の埋葬にあたって、石室を築き終ってから玄室内に棺を置くことは

できない。天井部を失っており構造がわからないので確かではないが、天井部を築く前に上から納めるか、あるいは袖部を築く前に横から納めたと考えられる。これまで便宜的に横穴式石室の名称を用いてきたが、このような構造をとる石室に対してはやや不適當であり、むしろ横口式石室の名称を用いる方が適當であろうと思われる。

また、玄室の平面形をみると長さより幅が広いことが注目される。このような玄室が横に長い横穴式石室は、長崎県対馬、福岡市、石川県七尾市、兵庫県姫路市、京都市幡枝などに散在しているほか、和歌山県では岩橋千塚などに約25例が知られている。これらについては後でふれたい。2号墳の築造時期は、須恵器の型式からみて6世紀前半と考えられる。(大野)

〔註〕

① 水野清一・編 『対馬』東方考古学叢刊乙種第

6冊 東亜考古学会 1953年

- ② 倉瀬戸古墳群調査団・編 『倉瀬戸古墳群』 1973年
- ③ 九学会連合能登調査委員会・編 『能登』 1955年
- ④ 葛野 豊 「兵庫県飾東1号墳」 『古代学研究』34 1963年
- ⑤ 京都大学の調査になる。
- ⑥ 本年3月に大阪府大東市堂山古墳群が大阪府教育委員会によって調査され、横長の玄室をもつ石室が検出された。
- ⑦ 末永雅雄・蘭田香融・森 浩一『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究紀要第2冊 1967年
- ⑧ 森 浩一・田中英夫「和歌山県百合山古墳群調査概要」『古代学研究』24 1960年

3号墳

位置と墳丘 3号墳は東側の尾根の南側突端に位置する。海拔は約55mで、尾根の裾から約15m上にある。この部分は10×6m程度のやや平坦なところで、その北側は高さ約6mの隆起となっている(図22)。既に早く樹木は伐採されていたが、もとは松の疎林であった。

北側の隆起は、腐植土の下にただちに岩盤の露出

している部分が多く、自然地形である。舌状の平坦地については、北側では表土下約40cmまで黄灰土色の堆積であり、その下は自然層となっていた(図23)が、南側の突端部では堆積土は薄く、自然層が露出してい

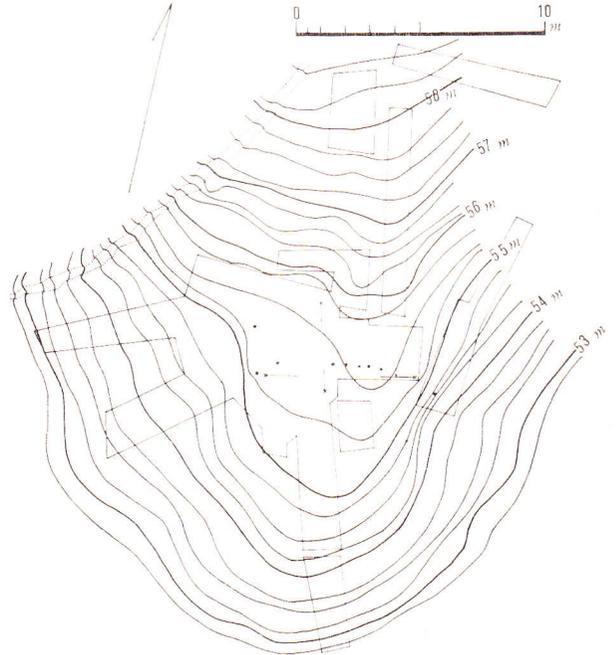


図22 3号墳墳丘測量図 ・は墳輪の位置を示す



図25 墳輪出土状態実測図

平坦地の堆が、てい

る部分もみられた(図24)。これらの黄灰色土はその中に埴輪の破片を多く含んでおり、本来の墳丘の盛土ではないと考えられる。このように墳丘の形・規模はよくわからない。また、トレンチを墳丘に相当する部分のほぼ全域にわたって掘けたが、埋葬施設は検出されなかった。

埴輪列と遺物の出土状態 舌状の平坦地のほぼ中央で、東西方向に約7mにわたる埴輪列を検出した(図25)。元の位置を保っていたものを東から埴輪1号～10号とする。埴輪11号は基底部の破片が1個所にかたまっていたもので、この点元の位置を保っているものか若干の疑問がある。埴輪1号と5号は基底部に擁をもち、形象埴輪と考えられる。埴輪8号は盾形埴輪、埴輪10号は壺(朝顔)形埴輪である。ほかは円筒埴輪である。さらに、埴輪7号の北側約80cmのところに形象埴輪片がまともって検出されたが、地層の検討によ

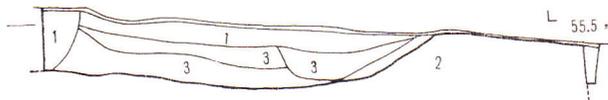


図 23 3号墳 墳丘断面図(南北方向)
(1. 灰褐色土 2. 黄色混礫土 3. 黄灰色土)

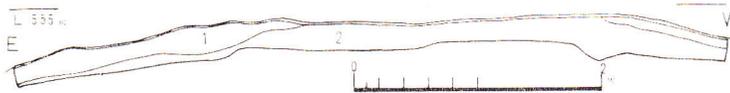
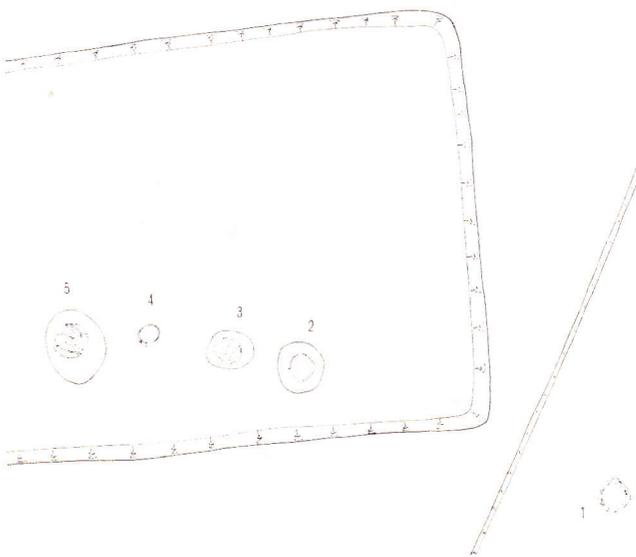


図 24 3号墳 墳丘断面図(東西方向)
(1. 灰褐色土 2. 黄灰色混礫土)



1～11は埴輪の番号を示す

って後代に元の位置を動かされたものであることがわかった。この埴輪の多くは盾形埴輪の破片と考えられ、ほかに家形埴輪の脛木が2個ある。また、埴輪10号付近では埴輪の破片が散乱状態で検出され、この中に遊離した円筒埴輪基底部の破片が数片みられた。これらの埴輪片に混って、須恵器甕・杯・高杯・罍の破片が検出されたが、いずれも元の位置を保つものはなかった。また長さ10～15cm程度の緑泥片岩系の破片が若干みられた。

埴輪2号から7号は、40～60cmのほぼ等間隔でならんでおり、それぞれ岩盤を直径20～20cm、深さ10～15cmの円形に掘り込んでその中に据えている。いずれも基底部が数片に割れて遺存していた。これらの基底部の高さはあまり差がない。埴輪1号は、埴輪2号の東側約1.7m離れており、基底部も約1.1m低いところにある。埴輪8号は埴輪7号の西約2.3mのところであり、基底部は完存していたが、やや西側に傾いた状態で遺存していた。埴輪10号は8号の約1.8m北西のところであり、口縁部を北へ向けて倒れた状態で検出された。基底部は埴輪8号から約14cm高い位置にある。埴輪1号・8号・9号・10号は岩盤を掘り込んだ据え穴をもたず、盛り土によって基底部を固定されていたと考えられる。

遺物 3号墳から出土した遺物は次のとおりである。

円筒埴輪	8個
円筒埴輪破片	多数
壺形埴輪	1個
形象埴輪の台	2個
盾形埴輪の台	1個
盾形埴輪破片	3個体
家形埴輪破片	2個
不明形象埴輪破片	1個
須恵器杯蓋	2個
須恵器杯身	1個
須恵器高杯	2個
須恵器罍	1個
須恵器甕	2個体
弥生式土器破片	若干

円筒埴輪(図版第8 図26図27) 埴輪2号・3号・4号・6号・7号・9号は元の位置を保っていた。このほか遊離した破片の中から7個体分の基底部を確認した。ま

た主として壺形埴輪の付近に散乱していた破片の中から11個体分の口部破片がみられた(図28)。横方向の刷毛目をもつ破片(図28・12)が少量みられるが、形

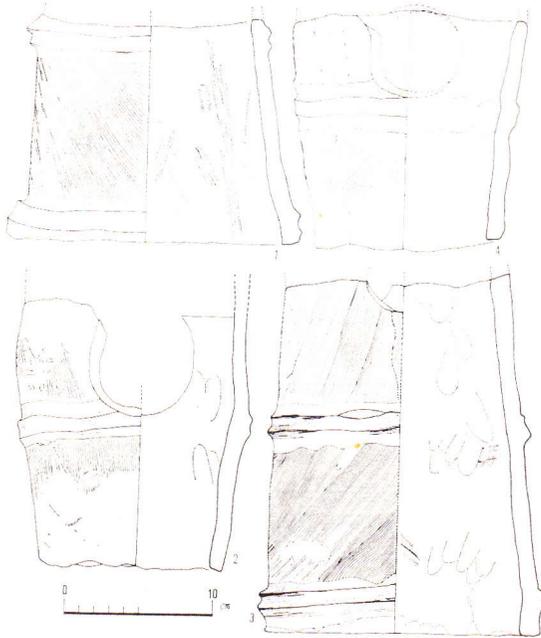


図 26 3号埴輪実測図
(1. 埴輪1号 2. 埴輪2号 3. 埴輪5号 4. 埴輪3号)

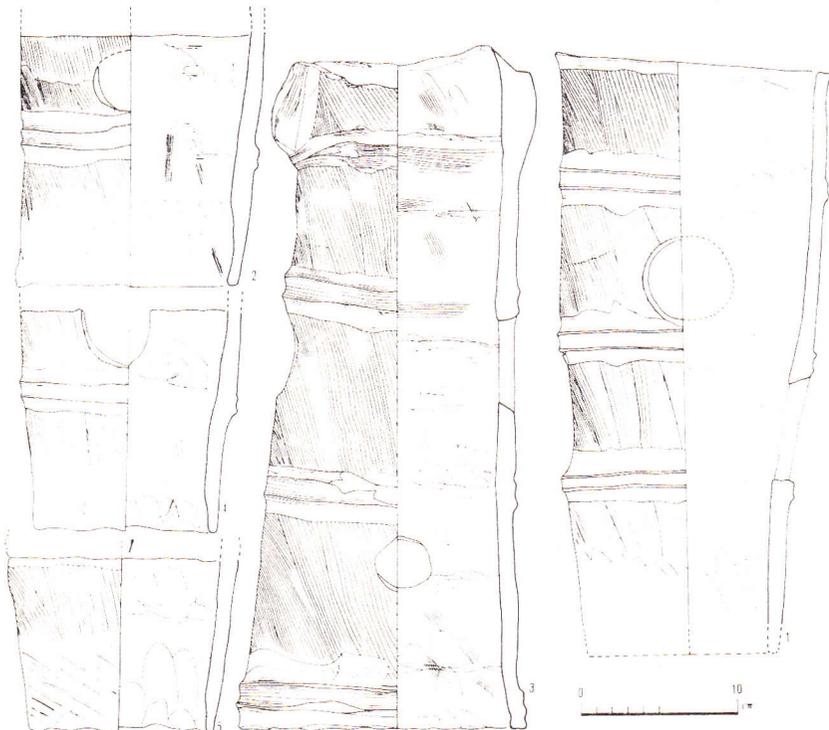


図 27
3号埴輪実測図

1. 埴輪6号
2. 埴輪7号
3. 埴輪8号
4. 埴輪9号
5. 埴輪12号

象埴輪の可能性もある。埴輪6号以外は基底部が復元できただけであった。図27・2は埴輪6号で、基底部が数片に割れていたが元の位置は保っていた。周辺に散乱していた破片を接合して口部まで復元することができた。高さ37.3cm、口径17.5cmある。胎土は比較的良く選ばれている。薄い赤褐色を呈している。箍は4段あり、最下段の箍のやや下まで全体に左上右下方向で幅約1mmの刷毛状器具によって整形し、そのあとで箍を貼りつけている。箍の幅は約1cmある。口部はナデ整形によっており、やや区形を呈している。円孔は4個あり、最下段と2段目の箍の間に2個、2段目と3段目の箍の間に2個がそれぞれ向かい合っている。これら2対の円孔の方向はほぼ直角である。円孔の直径は約5cmあり、切り口は斜めで外側が広い。内側には指頭痕が全体に残っている。

壺形埴輪(図版第8図29)埴輪10号ではほぼ完存している。高さ48cmある。胎土は砂粒を含み焼成は悪くもろい。箍は5段ある。下から3段目の箍より下は左上右下方向、上はほぼ縦方向、口部付近は左上右下方向に幅1mm程度の刷毛状器具で整形し、そのあとで箍を貼りつけている。口部は大きく外反しいわゆる朝顔形を呈しており、ナデ整形によって区形を呈している。頸部から肩部へはなだらかな曲線を描き、あまり肩の張りはない。頸部から口部へかけてのひずみ大きい。

が復元
基部
周辺に
ことが
比較的
は4
下方向
とで
はナ
円孔は
段目と
る。
の直
脚に

円孔は4個あり、
最下段と2段目の
籬の間に2個、2
段目と3段目の籬
の間に2個がそれ
ぞれ向い合っている。
これら2対の
円孔の方向はほぼ
直角である。直径
は約6cmある。切
り口は斜めで外側が
やや広い。口部の
外反した部分の内
側は横方向の刷毛
目整形によってい
る。肩部以下の内
側には指頭痕がみ
られる。

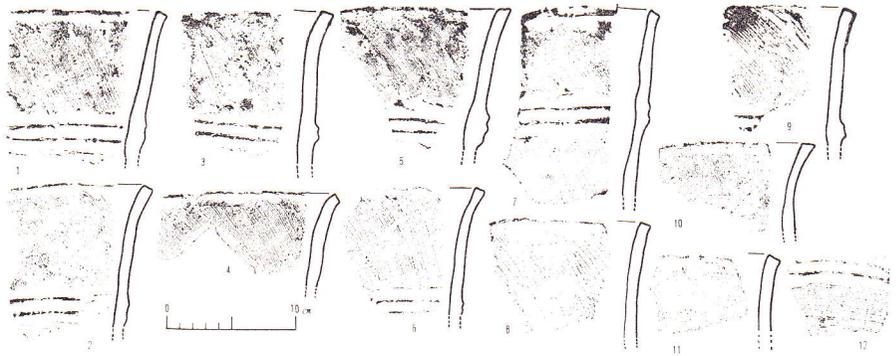


図28 3号墳円筒埴輪口部とその他の破片

盾形埴輪(図版第8・図27・4図30) 図27・4は埴輪8号で盾形埴輪の台である。基部が数片に割れてやや傾いた状態にあったが、元の位置を保っていた。形象部を接合することはできなかった。やや上すぼまりの円筒形で、籬は基底にあるものを合せて4段ある。4段目の籬のすぐ上には、左右へ張り出した板状の形象部の一部が残っている。全体に幅2mm程度の粗い刷毛状器具によって左上右下方向に整形した後に籬を貼りつけている。さらにその後で形象部をつけた上を同様の刷毛で縦方向に整形している。形象部の厚さは約1cmで、円筒部に対して直角でなくやや斜めにつけられている。円孔は4つあり、2段目と3段目の籬のすぐ下にそれぞれ2個ずつ向かい合っている。これら2対の円孔の方向はほぼ直角である。下の円孔は直径約3.5cm、上の円孔は約5cmある。いずれも切り口が斜めで外側が広い。内側は指頭痕が全面に残っている。

図30は盾形埴輪の形象部で、部分的に接合しただけで全体の形はよくわからない。焼成からみて1~7と8・9の2種類がある。1~4は厚さ1~1.3cmの粘土板で、左右に張り出した部分である。1では円筒部がわずかに残っておりこの部分では約8cmの幅で張り出していることがわかる。いずれも表面は2mm程度の刷毛目整形、裏面はナデ整形によっている。3・4では5×8mmの方形の孔が裏面まで貫通して斜めにあけられている。5・6・7は円筒部を伴った破片である。5では形象部的一端が残っており、板状部分の幅が7~8cmあるので、形象部全体の幅は約28cmあることがわかる。7は板状の形象部の下端でその下の籬が一部みられる。これらの破片でみると円筒部は縦方向、

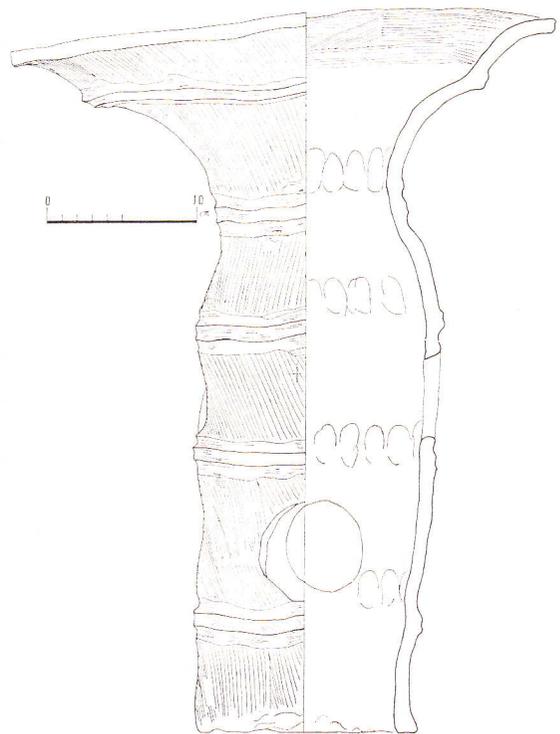


図29 3号墳壺形埴輪実測図(埴輪10号)

板状の形象部は横あるいはやや斜めに刷毛目整形されている。胎土はやや砂質であるが良く選ばれており、焼成も比較的良く淡赤色を呈している。胎土焼成からみて埴輪6号(盾形埴輪の台)と同一個体のようなのであるが、7が形象部下端と思われるところから、2個体が混っているようである。埴輪1号・5号(形象埴輪の台)のいずれか、基部に円孔をもつこととからみておそらく埴輪1号、が盾形埴輪であった可能性がある。さらに、形状・整形は同じであるが焼成が悪く黄灰色を呈し質のもろい破片が若干ある(8・9)。い

ずれも全体の形の復元は困難であるが、左右に張り出した部分に区形の凹凸がある形態かと思われる。

家形埴輪 (図31・1・2)

短い棒状の部分が二個ある。長さ約8.5cm、直径約3cmでやや扁平である。表面は粗い刷毛目整形によって

いる。裏面には本体からとれた楕円形の痕跡がある。家形埴輪の堅魚木であろうと思われるが、剝落痕の形からみて若干の疑問はある。

不明形象埴輪 (図31・3) 厚さ約1cm、幅18.5cmのややゆがんだ方形の板状の一部である。図の上と右にあたる部分は幅1.3cmの薄い粘土帯が貼りつけられている。裏面にはない。焼成が悪く磨滅がいちじるしいが、表面は粗い刷毛目整形によっている。裏面はナデ整形によっている。斜めに裏面まで貫通する直径5mmの小孔がある。

須恵器杯蓋 (図32・1・2) 1は体部下半の約4分の1の破片である。口径は11.3cmと小さい。肩部および口部下端内側の稜はかなり顕著である。外面上半を篋削り、外面下半と内側は仕上ナデによっている。製作のときの回転方向は時計と逆廻りである。2は口部の小破片である。口径13.5cmある。口部下端内側の稜はかなり顕著である。内外面ともに仕上ナデによっている。胎土は良く選ばれている。

須恵器杯身 (図32・3) 口部から体部上半にかけての小破片である。口径13.3cmある。口部上端内側の稜はない。立ち上りはやや内傾している。受け部はくぼみがなく平端である。体部上半は内外面ともに仕上ナデによっている。体部下半外面は篋削りをしてい

る。胎土は良く選ばれており焼成は良い。器壁は厚い。須恵器高杯 (図32・4・5) 5は無蓋高杯の杯部の破片である。口径12cmある。外面に1条の稜と鈍い凹帯があり、その間に櫛状器具による波状文を施している。内外面とも仕上ナデによっている。4は無蓋高

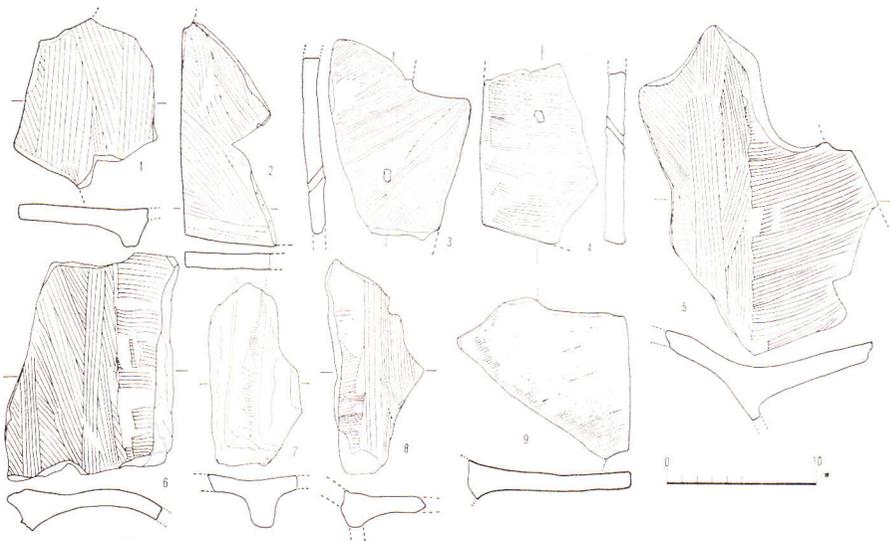


図30 3号埴輪形埴輪破片

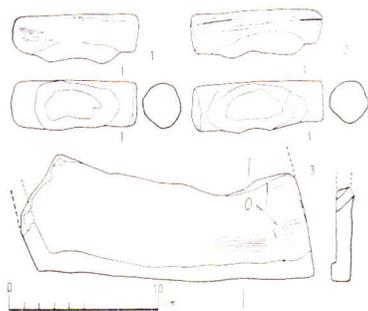


図31 3号埴輪家形埴輪破片と形象埴輪片

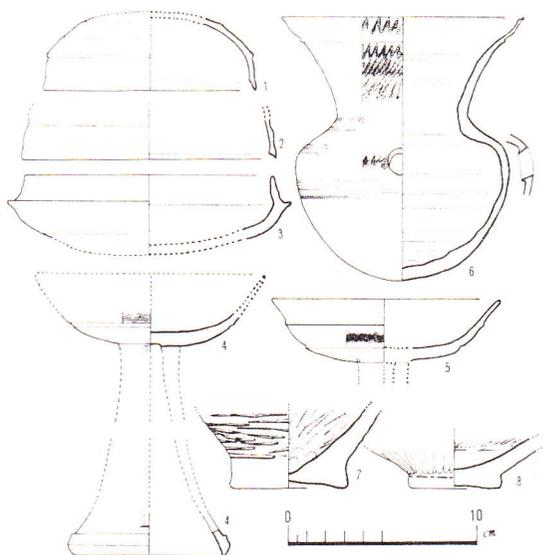


図32 3号墳出土の須恵器と弥生式土器

杯の杯部と脚部下端の小破片である。胎土・焼成からみて同一個体の可能性がある。杯部は口部を欠いている。外面に鈍い凹帯がありその上部に櫛状器具による波状文がある。内面は仕上ナデによっている。脚孔は4個ある。脚部は下端が丸くわずかに彎曲している。焼成はやや悪い。

須恵器罇(図32・6) 口部・頸部・胴部・底部のそれぞれの破片から図上復元したものである。直接に接合はしないが同一個体と思われる。口径13cm, 胴部の最大径11.4cmある。口部上端内側の稜はやや鈍い。外面は口部から頸部にかけて櫛状器具による波状文が施されているが、頸部の近くではいちじるしく不明瞭である。頸部は太いが胴部との間に明瞭な線をもたず、ややゆるやかに口部へ続いている。胴部中央には不明瞭な波状文があり、その上に円孔があげられている。円孔はやや下向きに斜めに外側からあげられている。胴部はやや肩が張った器形である。口部は内外面ともに仕上ナデによっている。

須恵器甕(図33) 主として埴輪1号の付近で一括して検出された破片であるが、地層の検討によって後代の攪乱によって元の位置を動かされたものであることがわかった。ほとんどが胴部の破片で、部分的に接合できただけで全体を復元することはできなかった。口部の破片からみて2個体あったものと思われる。2は口頸部上端付近の凸帯がやや不明瞭で、その下の櫛描き波状文の頭が尖っている。1は同じ個所の凸帯が2に比べてやや丸みをもっているが明瞭で、櫛描き波状文の頭は丸い。この櫛描き波状文は上下2段あるが、この間を区切って2には鈍い凹帯が2本施されているが、1は不明瞭であるが凸帯状に整形されている。口径は1が約25mmあり、2はそれよりやや小さいようであるが、小破片であるため復元には制限がある。胴部の破片にも器壁の厚さが4~5mmの薄手のものと、6~9mmの厚手のものと二種類がある。いずれも外面は格子状、内面はいわゆる青海波状の叩き文が残っている。厚手のものは2の口部と、薄手のものは1の口部と同一個体であろう。

弥生式土器(図32・7・8) 7は甕形土器の底部である。外面には叩き目がのこっている。内面は粗い刷毛目整形がみられる。胎土焼成ともに悪い。8は壺形土器の底部で、外面は篋磨き、内面は刷毛目整形によっている。胎土は比較的良い。ともに後期の土器である。

小 結 先に述べたように、3号墳では埋葬施設を

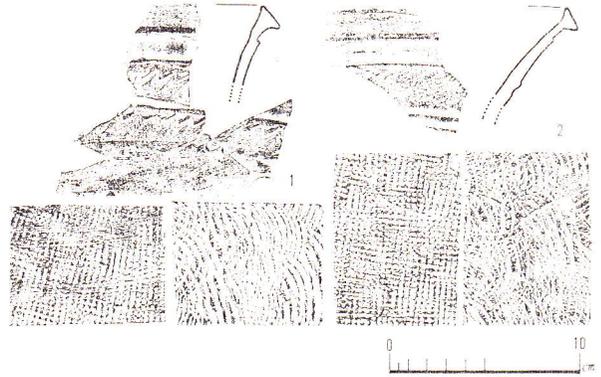


図33 3号埴須恵器罇の口頸部波状文と胴部叩文

確認することができなかった。埴丘の盛土がほとんどなかったところからみて、既に盛土とともに失われたものと考えられる。堆積土から検出された小型の須恵器類は副葬品であった可能性が強い。また、須恵器罇は1号墳のそれと同じ使われ方をされたものと思われる。

埴輪列は大きくみて、埴輪1号から9号までが東に中心をもってやや円弧を描いている。原状を正確に復元することは困難であるが、埴輪2号から7号の間隔でもって復元すると、形象埴輪の間に6基の円筒埴輪があり、計16基以上の埴輪が樹立していたことになる。しかし、埴輪10号やその付近の基底部はその外側にあることになり、また埴輪7号と8号の間には埴輪の屈え穴がないことから埴輪列が連続していたとは断定できない。

主体部の位置が南側の平坦部分であるか、あるいは北側の隆起上にあったかは、まったくわからないが、埴輪列のあり方からみて平坦部分にあった可能性がある。いずれにせよこのような埴輪列のあり方は、埴丘を圍繞するものではなく、尾根の一部を区画する性格をもったものと考えられる。このような埴輪列のあり方は晒山3号墳⁽¹⁾や鳴滝2号墳⁽²⁾に伴うものにみられる。検出された須恵器には、口径が小さく肩部の稜が明瞭な杯蓋(図32・1)のように第Ⅰ型式後半の特長を備えたものと、罇や無蓋高杯のように第Ⅱ型式の要素をもったものがある。このことからみて、築造時期は6世紀初頭と考えられる。(大野)

〔註〕

- ① 8頁註②に同じ。
- ② 8頁註③に同じ。

挿図番号	(cm) 残存高	(cm) 底 径	口部径 (最上部)	円孔径	箍の調整	内面調整	外面調整	備考
1 26-1	15.0	19.8	(15.0)	4		ナデに伴う条痕 指頭痕	連続した刷毛目	形象埴輪台 焼成良
2 26-2	17.8	12.2	(15.0)	6.5		ナデに伴う条痕 へら痕 基底部に指頭痕	断続した刷毛目 (縦方向)	円筒埴輪
3 26-4	15.3	12.3	(15.5)			7 cm幅の粘土帯 の輪積, 指頭痕 基底部にへら痕	連続した刷毛目 (右傾)	円筒埴輪
4								円筒埴輪 基底部の $\frac{1}{8}$
5 26-3	23.0	18.5	(15.0)	5	横ナデ	ナデに伴う条痕 指頭痕	連続した刷毛目 (左傾)	形象埴輪台 焼成良
6 27-1	37.3	12.5	17.5	5~5.5	横ナデ	7.5 cm幅の粘土 帯輪積, ナデに伴 う条痕の指頭痕	連続した刷毛目 (右傾)	円筒埴輪 完存
7 27-2	16.2	14.3	(15.6)	4	横ナデ	5 cm幅の粘土帯 の輪積, ナデ条 痕, 指頭痕	断続した刷毛目 (右傾)	円筒埴輪
8 27-3	43.7	18.3	(12.5)	3.5 5	横ナデ	5 cm幅の粘土帯 の輪積, ナデ条 痕, 指頭痕	1.5 cm単位の連 続した刷毛目 (右傾)	盾形埴輪台 焼成良
9 27-4	14.0	11.5	(14.0)	6	横ナデ	7 cm幅の粘土帯 の輪積, 基底部 に指頭痕	連続した刷毛目 (右傾)	円筒埴輪
10 29	48.0	14.5	36.5	6~6.5	横ナデ	9 cm幅の粘土帯 の輪積, 輪積痕 の上に指頭痕	細かい連続した 刷毛目 (右傾)	壺形埴輪 焼成不良
11	8.5	約14				基底部に指頭痕		円筒埴輪 基底部の $\frac{3}{4}$
12 27-5	11.0	11.5	(15.0)			7 cm幅の粘土帯 の輪積, 基底部 に指頭痕	連続した刷毛目 基底部窪痕	円筒埴輪 遊離した破片中 より復元

表 2 3号墳出土埴輪計測表

15 地点

東側の丘陵の斜面に直径約3 m, 高さ2 m弱の隆起が認められたので試掘したが以下の遺物を検出したのみであった。

- 盒子破片 1個
- 須恵質小皿片 1個
- 瓦器破片 1個

盒子(図34・1) 青白磁の盒子で, 口径5.7 cmある。器壁の内外に施釉しているが, かえりの部分の外側は施釉されていない。外側には胎土に陰刻した文様がある。

須恵質小皿(図34・2) 口径6.6 cm, 器高1.4 cmある。内外面ともにナデ整形をおこなっている。胎土・焼成ともによい。

瓦器(図34・3) 瓦器塊の底部で高台の直径4.6 cmある。高台は痕跡程度である。内側の暗文はよくわからない。

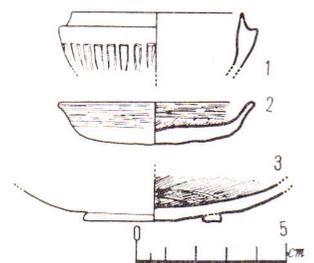


図34 15地点出土の遺物

(大野)

第 4 章 総 括

これまで述べてきたように、今回の調査では尾根上にある3基の古墳について発掘調査をおこなった。試掘の結果からこれら3基の古墳のある二つの尾根支脈上にはこれら以外に古墳はないと考えられる。また二つの尾根とも、弥生後期の遺跡が存在していた形跡がつよく、部分的には(1号墳付近)包含層がのこっていた。おそらく高地性集落がそれぞれの尾根の先端の平坦地に営まれていたであろう。

まずそれぞれの古墳について調査結果を要約しよう。1号墳は直径約8mの円墳で、埋葬施設は木棺直葬で刀子・須恵器・玉を副葬し、墳丘裾部に大型の甕を含む須恵器類を置いていた。時期は5世紀後葉と考えられる。2号墳は小型の横穴式石室をもち、6世紀前半の築造と考えられる。直径10m程度の円墳であろう。3号墳は埋葬施設は検出できなかったが、埴輪列が検出された。時期は6世紀初頃であろう。それぞれの築造年代からみて、1号墳・3号墳・2号墳の順に形成されており、時期的には6世紀初頭を前後する比較的短かい期間に相ついで造られたものと考えられる。

次に若干の問題点を整理してみよう。まず1号墳では、墳丘裾部で底部に穿孔された須恵器大甕を含む須恵器群が検出された。このように古墳の墳丘上に大型の須恵器、とくに甕や壺を据えた例は日本の古墳でも約10例が知られている。置かれた場所が明確なものでは1号墳と同じ円墳の裾部に置かれた例⁽¹⁾、前方後円墳のくびれ部に置かれた例⁽²⁾がある。また横穴式石室の羨道部に置かれたものが若干ある。あるいは群集墳の墓域内に単独で置かれた例もある。これらの土器のうち、底部に穿孔された例はさらに少なく、その分布や意義を論じるとはかなり困難である。これまでに提出された考察を要約してみると、大型須恵器の供献⁽³⁾については霊のよりしとしての意義を認める見地や国文学的な立論から土器そのものに宗教的威力が認められていたとする見解⁽⁴⁾がある。また単なる供献ではなく、陪葬的な棺として使用された可能性も考えられている⁽⁵⁾。底部の穿孔の意義については、まず仮器として使用する意味を持たせていることが考えられるが、この場合古墳や周溝遺構(周溝墓)などに用いられた土師器とくに古式土師器に多くみられる穿孔との関係が明らかにされる必要がある。

このように大型の陶質甕を古墳の埋葬施設の付近におくことは、最近の朝鮮半島における調査、とくに古

新羅と伽耶地方の古墳で多くの諸例が知られるようになった。そこではまだ底部穿孔の例はよくわからないが、大甕を埋納するという点では共通している。

2号墳の横穴式石室は横長の玄室をもつことが注目されるが、このような石室をもつ古墳にいくつかの類例があることは先に述べた。これらの古墳を時期的にみると、長崎県小茂田矢立山第2号墳⁽⁶⁾と福岡市駄ヶ原古墳群C地区第5号墳⁽⁷⁾は7世紀代の築造で、石川県蝦夷穴古墳では7世紀初頭の土器が検出されている。和歌山県百合山1・2号墳⁽⁸⁾、和歌山市岩橋千塚前山B134号墳・寺内18号墳⁽⁹⁾は6世紀前半の築造である。石室の形態をみると小茂田矢立山第2号墳は竪穴式石室様の構造をもち数枚の板石をならべて天井石としている。京都市幡枝の例も天井石を失っているが天井部は同様の構造と思われる。蝦夷穴古墳や姫路市飾東1号墳⁽¹⁰⁾は天井部をいわゆるドーム状に持ちおくり1枚の天井石を用いている。このように石室の構造には相違が認められるが、これが古墳の時期的な差異にのみ基くものではないようである。以上いくつかの例について時期と石室構造を概観したが、雨が谷3号墳の例では通路としての羨道の意味が全くなく、単葬墓であることが留意される。この点からすれば飾東1号墳・蝦夷穴古墳は規模が大で羨道の機能を果たしているが、駄ヶ原C-5号墳はあきらかに単葬墓であり、矢立山第2号墳や京都市幡枝の例もおそらく単葬墓であろう。

和歌山県下の類例をみると、玄室が小型で羨道部が短かく、単葬墓のものが多いことが注目される。石室の構造としては側壁には持ちおくりがあり1枚の天井石を用いている。このような横長あるいは正方形に近い横長の玄室をもつ小型の横穴式石室は岩橋千塚中に比較的多く、その周辺にも散在している。時期が明確にされたものには横穴式石室としては比較的早い時期のものも多く、玄室が方形を呈する初源的な形態から縦長へと移る過渡的性格をもつものとも考えられる。しかし、岩橋千塚の横穴式石室の編年的観察ではそのもっとも古い段階のものは縦長長方形をも採用しており、過渡的という位置づけだけでは不十分な点もあろう。

さて今回調査した3基の古墳はこれだけで一つの古墳群を形成するものではなく、隣接する丘陵上の古墳つまり晒山古墳群や大谷古墳と同じ古墳群と考えるべきであろう。東側丘陵上の鳴滝古墳群については、3基以上の横穴式石室からなり、時期的に6世紀中葉以

降の築造と考えられる。このことから晒山・雨が谷地区の古墳群に後続するものも⁽¹⁸⁾考えられる。しかし鳴滝古墳群が晒山・雨が谷丘陵とはやや隔絶した半独立丘陵上にあること、およびその上方の尾根上で先行する2基の古墳が確認されたこと⁽¹⁹⁾からみて、晒山・雨が谷古墳群と一時期併行して形成された別個の古墳群の可能性はある。ただ、その盛期は晒山・雨が谷古墳群の盛期より一時期後である。

雨が谷丘陵上の3基の古墳を晒山・雨が谷古墳群の中に置いてみると、古墳群が形成された時期のほぼ中葉に位置するであろう。古墳群と付近の遺跡をあわせてみると、楠見遺跡や大谷古墳のように外来的要素を強くもった部分と、そのような要素が少ないより小規模な他の古墳があるようにみえる。しかし、朝鮮半島における墓制をみると木棺直葬は百済に多くみる墓制であり、古新羅や伽耶地方では埋葬施設の付近に陶質大甕を埋納することが多いことがわかる。つまり外来的要素が副葬品に直接的に強くでているものと、日本の古墳として漠然と認識されている場合でも外来的要素が一見弱くでているとみることのできる場合がある。楠見遺跡の陶質土器⁽²⁰⁾については晒山・雨が谷古墳群の大部分の古墳が築造される時期、つまり須恵器の形式でいえばⅠ後半にはほとんどその埋没を終えていたと考えられる。(森・大野・清水)

〔註〕

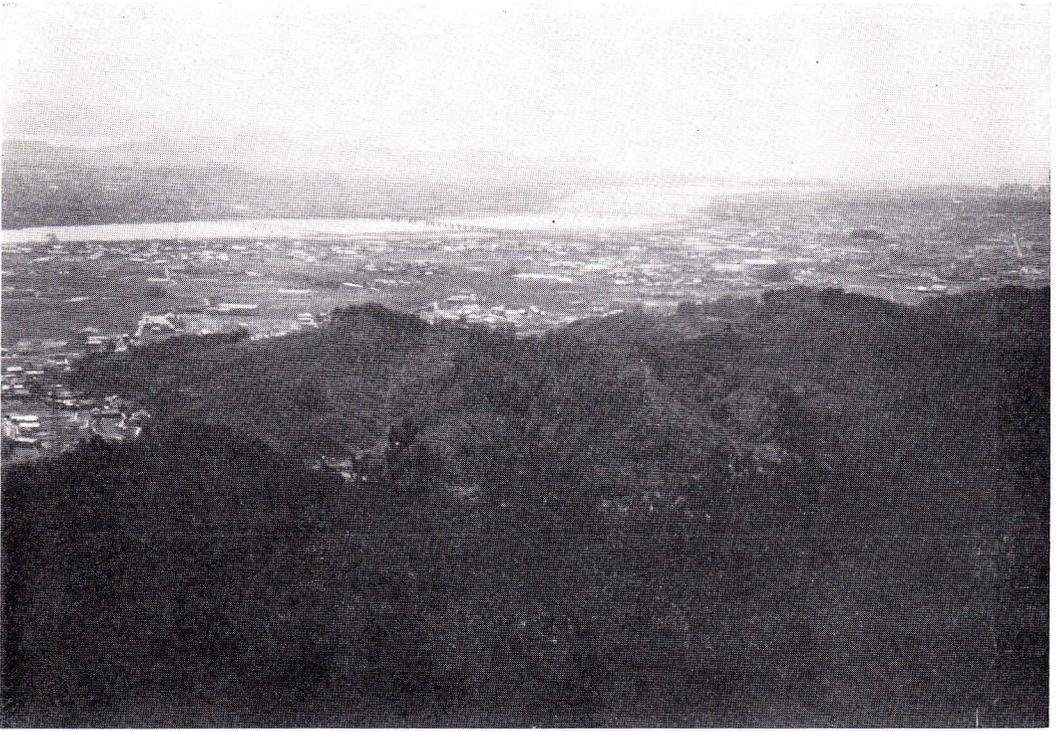
- ① 奈良県石光山第12号墳・福岡市片江8号墳
- ② 大阪府富木車塚・長崎県対馬ネソ積石塚2号墳・鳥取県福岡古墳群小枝12号墳・和歌山市井辺八幡山古墳・岩橋千塚天王塚古墳
- ③ 諏訪市綿之芝古墳・鳥取県福岡古墳群城山7号墳
- ④ 「淡路沖ノ島古墳群の第一次調査」『古代文化』

VI-2 1961年

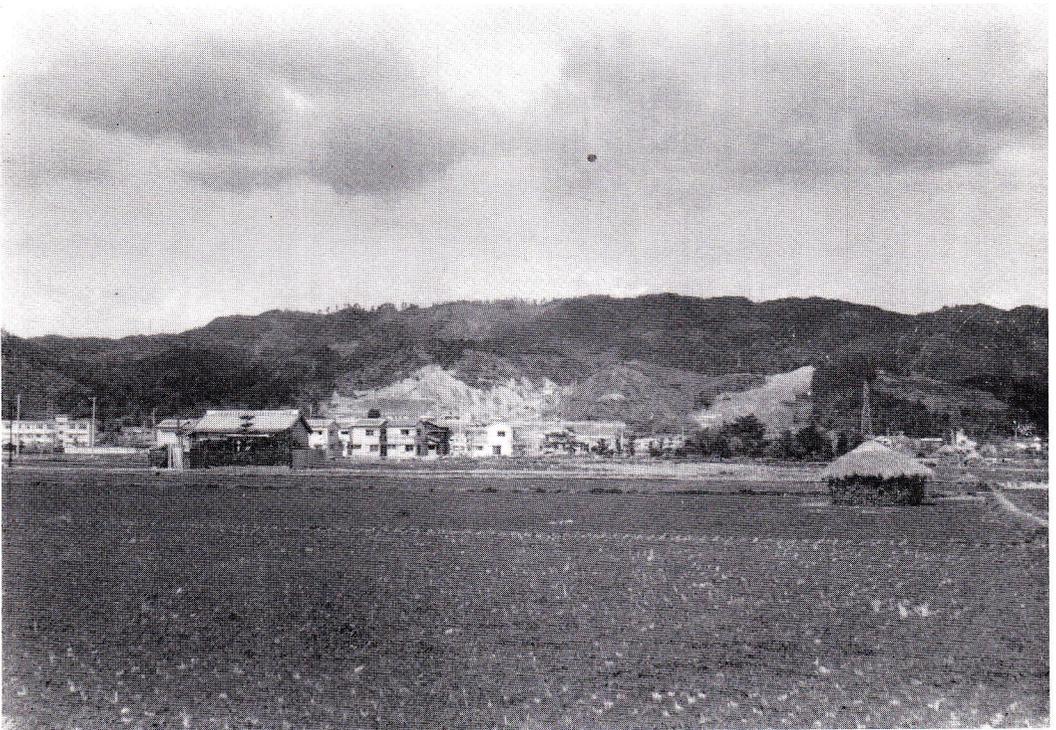
- ⑤ 桐原健「古墳出土の大甕」『古代文化』23—11 1971年
- ⑥ 吉井 巖「タケミカヅチノ神」『国語と国文学』49—8 1972年
- ⑦ 森 浩一『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第5冊 1972年 なお奈良県西松本2号墳のように須恵器を用いた壺・甕棺の例もある。金谷克巳「大和国西松本古墳出土の須恵器について」『上代文化』19 1956年
- ⑧ なお、朝鮮半島では次の例が知られている。京畿道驪州邑梅龍里2号墳・8号墳。いずれも石枕を付設し複数の遺骸を埋葬している。今西龍「上里古墳」『大正五年度古蹟調査報告』朝鮮総督府 1917年
- ⑨ 17頁註①に同じ。
- ⑩ 18頁註②に同じ。
- ⑪ 18頁註③に同じ。
- ⑫ 18頁註⑥に同じ。
- ⑬ 18頁註⑦に同じ。
- ⑭ 18頁註④に同じ。
- ⑮ 18頁註⑦および大野嶺大氏のご教示による。
- ⑯ 18頁註⑧に同じ。
- ⑰ 森 浩一「岩橋千塚の横穴式石室」『岩橋千塚』(前掲) 404頁～416頁
- ⑱ 8頁註②に同じ。
- ⑲ 8頁註④に同じ。
- ⑳ 鳴滝古墳群で古墳とは無関係に墳丘盛土の中に陶質土器片が含まれていた。楠見遺跡の報告者は鳴滝古墳群付近の平野部に陶質土器を包含する遺跡を想定しておられるが、楠見遺跡やその付近から運ばれた可能性もあろう。

図版第1 古墳群の立地と環境

紀ノ川

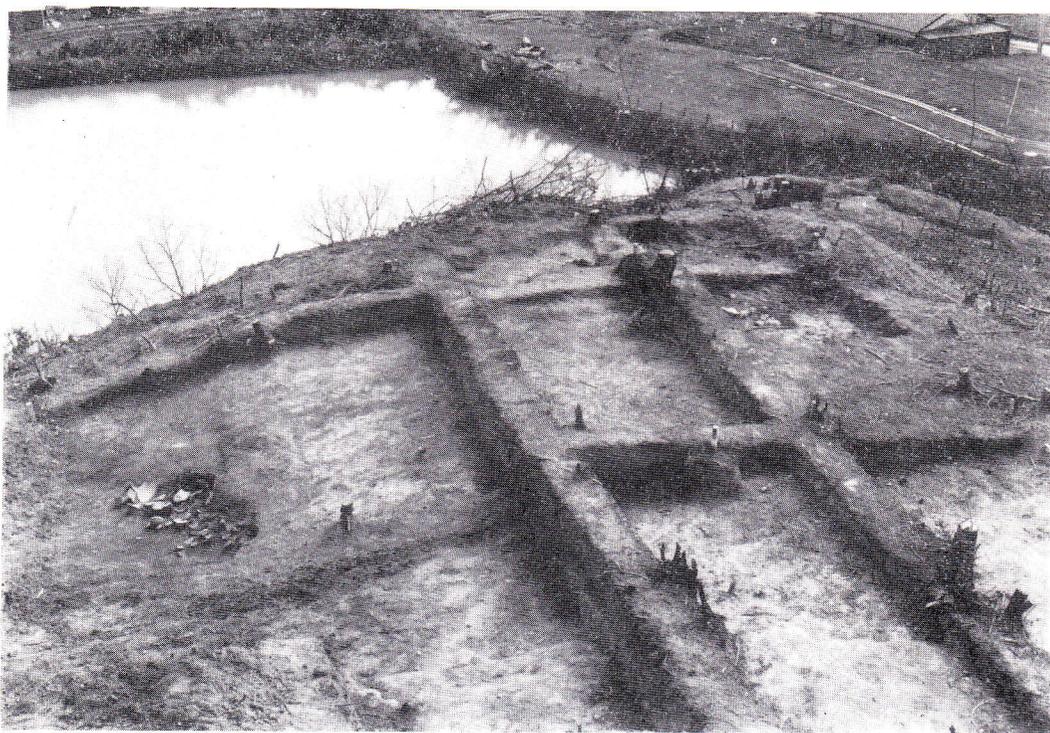


1) 北東から望む (大野嶺夫氏撮影)



2) 南から望む ↑ 大谷古墳

図版第2 1号墳



須恵器

D 墳 丘

埋葬施設



2) 埋葬施設 (南から)

図版第3 1号墳

大甕
→



1) 墳丘裾部の須恵器出土状態

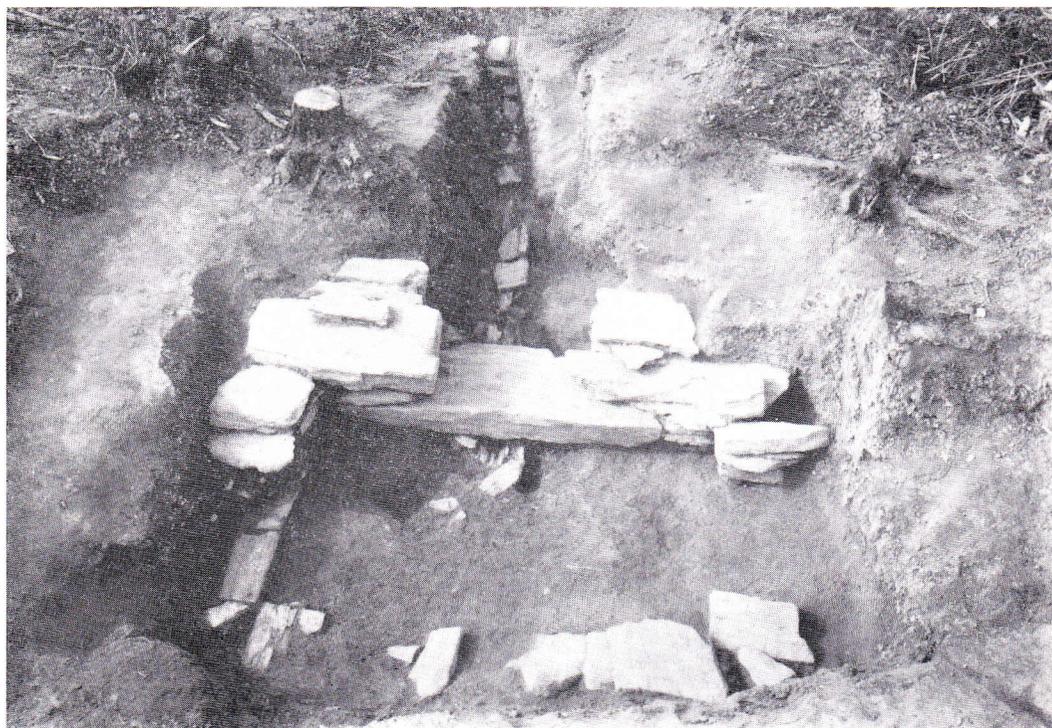


2) 墳丘裾部の須恵器出土状態 (大甕の遊離した破片を除いた状態)

図版第4 1号墳・2号墳



D) 1号墳 棺側の須恵器・高杯・杯



2) 2号墳 横穴式石室

図版第5 3号墳 埴輪出土状態

1) 埴輪2号(左)と
埴輪3号(右)



2) 埴輪10号とその付近の
破片散乱状態



3) 埴輪10号
(臺形埴輪)



図版第6 1号墳 須恵器



1) 須恵器大甕



2) 須恵器大壺



3) 須恵器壺



4) 須恵器短頸壺

图版第7 1号墳 須惠器



1) 須惠器高杯



2) 須惠器壺



3) 須惠器罍



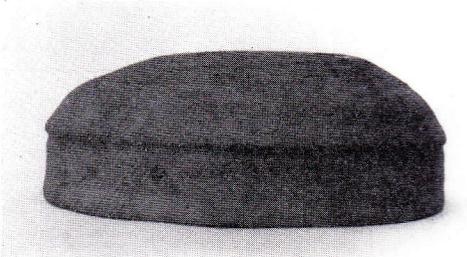
4) 須惠器杯蓋 图9·5



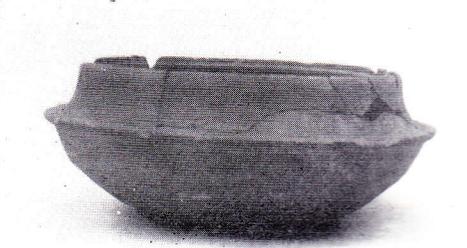
5) 須惠器杯身 图9·8



6) 須惠器杯蓋 图9·6

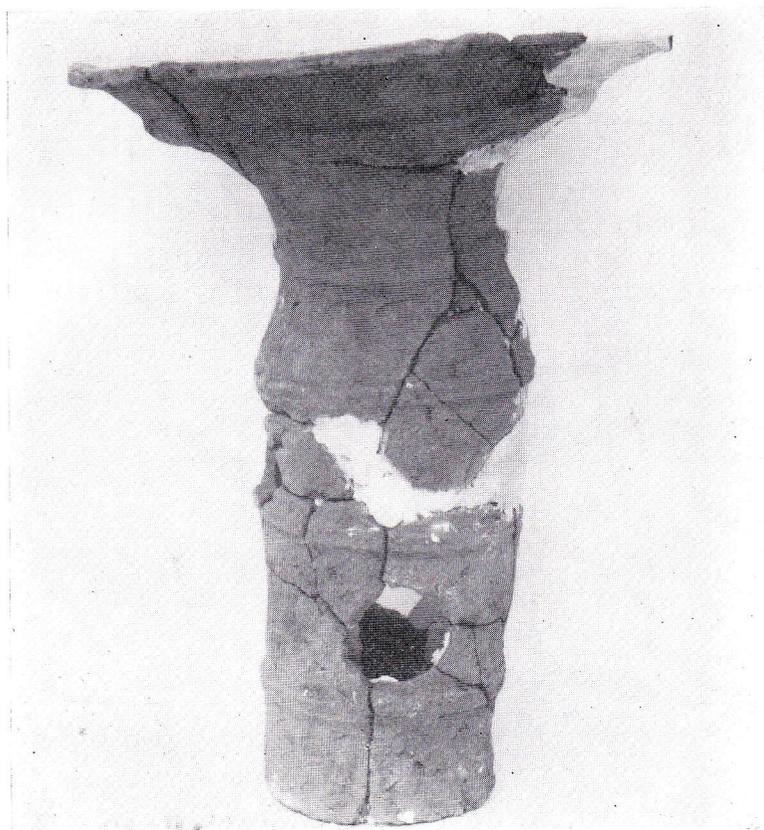


7) 須惠器杯身 图9·4



8) 須惠器杯蓋 图9·9

图版第8 3号墳 埴輪



- (1) 壺形埴輪
(埴輪10号)
- (2) 円筒埴輪
(埴輪6号)
- (3) 盾形埴輪
(埴輪8号)



2)



3)

調 査 参 加 者 氏 名

森 浩 一 (同志社大学教授)	千 賀 久 炭 田 知 子
宮 田 啓 二 (和歌山市文化財専門委員)	大 島 啓 子 志 賀 和 子
大 野 嶺 夫 (和歌山市史編纂委員)	龍 田 和 世 (同志社大学文学部学生)
大 野 左 千 夫 (同志社大学大学院文学研究科 学生)	吉 村 博 恵 (大谷大学文学部学生)
清 水 真 一 三 浦 到	田 中 弘 道 (和歌山市教育委員会嘱 託)
広 瀬 常 雄 久 保 哲 正	瀬 戸 実 (同志社大学卒業生)
坪 之 内 徹 猪 木 永 美	
事 務 局	坂 田 栄 一 (社会教育課々長・第2次 調査)
和歌山市教育委員会	竹 光 健 次 (社会教育課々長補佐)
稲 垣 優 (教育長)	西 山 哲 也 (社会教育課主任)
塩 路 保 雄 (社会教育課々長・第1次調査)	

同志社大学文学部考古学調査記録 第3号

雨 が 谷 古 墳 群 調 査 報 告

編 著 者 (代 表) 森 浩 一

発 行 1973年10月10日

発 行 所 和歌山市教育委員会
和歌山市西丁丁1番地

印 刷 所 堤 印 刷 所

